

TOTO

2014年 春号

Toward a Creative
Architectural
Scene

通信

Special Feature :
Master
and
Apprentice

Ito Toyo

Fukushima Katsuya

特集／師と弟子

伊東豊雄 + 福島加津也
青木淳 + 村山徹
竹原義二 + 矢田朝士
難波和彦 + 河内一泰

TOTO

通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 502
Spring 2014

Contents

特集1		
対談	伊東豊雄+福島加津也 「闘争の場に置かれて」	4
ケーススタディ	建築の原型を目指す 「柱と床」設計/福島加津也+富永祥子	10
特集2		
座談会	青木 淳+村山 徹 +加藤重矢子 「4年で独立するための日々」	16
ケーススタディ	過剰なシンプルさ 「N邸」設計/ムトカ建築事務所	21
特集3		
対談	竹原義二+矢田朝士 「建築に向かう姿勢を継承する」	26
ケーススタディ	身体を目覚めさせる空間 「ES house-02」設計/矢田朝士	31
特集4		
対談	難波和彦+河内一泰 「自分らしさを見つけるために」	36
ケーススタディ	スライドする床 「アマダハウス」設計/河内一泰	42
シリーズ		
旅のバスルーム89	文・スケッチ/浦 一也 グラン・ホテル・ドミネ(スペイン・ビルバオ)	46
現代住宅併走25	文/藤森照信 「武蔵新城の住宅」 設計/富永 謙	48
地域に生きる会社61	あいホーム	54
TOTOギャラリー・間で 展覧会をします	乾久美子+東京藝術大学 乾久美子研究室展 「小さな風景からの学び」	56
news file	TOTO News, cera trading news, Books	58

www.toto.co.jp

表紙写真/「柱と床」1階土間、写真/傍島利浩
編集制作/中原大久保編集室
デザイン/岡本一宣デザイン事務所
印刷/ゼネラルアサヒ

特集

師と弟子

Part

1

Fukushima Katsuya+Ito Toyo

Special Feature
Master
and
Apprentice

写真右より、
「柱と床」1階土間。
写真/傍島利浩
「N邸」窓。
写真/藤塚光政
「ES house-02」外室吹抜け。
写真/川辺明伸
「アマダハウス」1階ベッドルーム。
写真/川辺明伸



Part
3

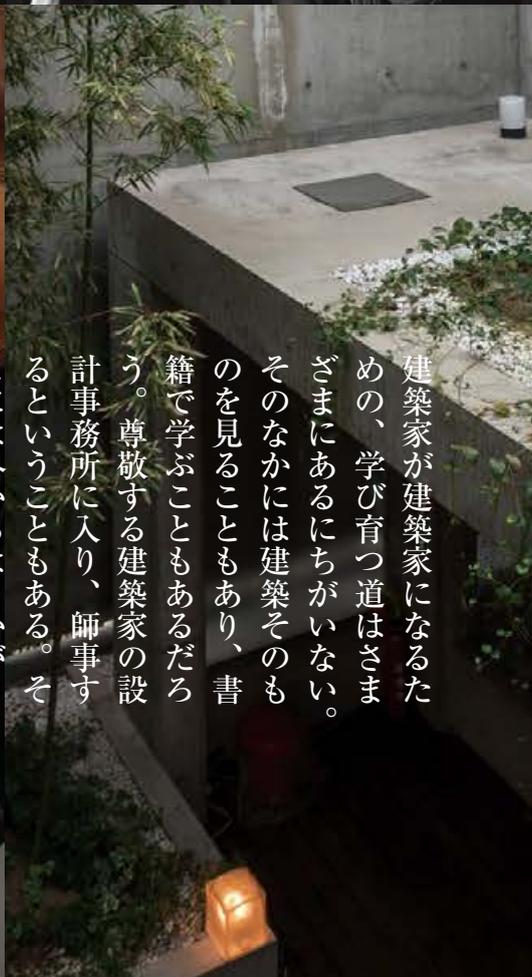
Yada Asashi+Takehara Yoshiji



Kochi Kazuyasu+Namba Kazuhiko

Part
4

ここには外からはうかがうことのできない秘技とでもいえるような何かがあるのかもしれない。直接、現場で、アトリエで、師とする建築家と弟子が対面するとき、何が起ころのか。あらためて師と弟子に聞いてみた。その結果がこの特集。



建築家が建築家になるための、学び育つ道はさまざまにあるにちがいない。そのなかには建築そのものを見ることもあり、書籍で学ぶこともあるだろう。尊敬する建築家の設計事務所に入り、師事するということもある。そこには外からはうかがうことのできない秘技とでもいえるような何かがあるのかもしれない。直接、現場で、アトリエで、師とする建築家と弟子が対面するとき、何が起ころのか。あらためて師と弟子に聞いてみた。その結果がこの特集。

Murayama Toru+Aoki Jun

Part
2



対談

特集／師と弟子／1

闘争の
場に
置かれて

弟子

福島加津也

伊東豊雄

師

最先端の建築に興味がなく、
集落に関心があったという
福島加津也さん。
その集落の強さに対抗しうる
初めての現代建築が
伊東豊雄さんの作品だったという。

まとめ／伊藤公文 写真／傍島利浩

Ito Toyo

Special Feature
Master
and
Apprentice

Part

1



Ito Toyo
Fukushima Katsuya

「柱と床」1階土間にて。
手前エントランスからま
っすぐに通り抜ける構成。
右手柱の外、側廊上部に
高窓が連なる。

Fukushima Katsuya

魅せられた現代建築

——福島加津也さんは東京藝術大学の大学院で学ばれ、伊東豊雄建築設計事務所を志望されましたが、動機はなんでしたか。

福島加津也 学生時代、最先端の現代建築にはあまり興味をもっていませんでした。むしろ、伝統的な集落に関心がありました。それで大学院生のときに日本中の40数カ所の集落を車の中に寝泊まりしながら北から南に見てまわりました。途中で当時メディアをにぎわせていた現代建築もいくつか見ましたが、心に訴えかけてくるものはありませんでした。けれども最後に九州にたどり着いて、熊本の「八代市立博物館」(1991)を見たとき、伝統的な集落の強さに対抗しうる現代建築に初めて出会ったように思いました。それが伊東豊雄さんの事務所の門を叩こうと思ったきっかけです。

伊東豊雄 何年頃かな。

福島 1993年ですね。「八代広域消防本部庁舎」(95)はまだ完成していませんでした。

——ほかの現代建築には魅せられなかったのですか。

福島 もちろん例外はありました。なかでも伊東さんの師匠である菊竹清訓さんの建築「徳雲寺納骨堂」(65/久留米)には感激しました。

伊東 菊竹さんの建築のベストワンに挙げる人も多いね。私が最も衝撃を受けたのは「東光園」(64/米子)ですが。

——それで、伊東さんの事務所にアプローチされた。

福島 事務所に大学院の先輩であるヨコモゾマコトさんがいたので、彼に電話をして取り次いでもらい、ポトフォリオを携えて面接を受けに行きました。

伊東 ポトフォリオはほとんどあてにならないので、直接会ったときの感じでたいは決めますね。最初の3カ月は互いに確かめあう期間、互いによしとなれば1年間の雇用契約、その後は期限を定めない雇用に移るという、3段階になっています。

——伊東さんの事務所には希望者が殺到して、競争率が高かったのではないですか。

伊東 いや普通はそんなことはないです。けれども、ちょうどその頃は入りたいという人が重なった時期かもしれません。

福島 入所がなくなって、94年から2002年までの9年間、在籍しました。——所員の在籍期間はどのくらいですか。

伊東 私たちのような規模の設計事務所としては、平均在籍期間は長いよ



3年くらいは
雑巾がけかなと
思っていました。

Fukushima Katsuya

うです。とくに決まりも方針もないのですが、担当の現場が終わったときに独立のタイミングで、早い人で4、5年、次が9、10年くらいに独立するという周期があります。4、5年というと、だいたいのことがわかってきて、経験を生かし、さあこれからという年数です。そのときに辞めてしまわれると事務所としてはとても痛いけれど、それはこちらの都合なのでしかたがありません。

福島 私が入る少し前に、キドサキナギサさん、佐藤光彦さん、曾我部昌史さんたちが辞めていて、所内には先輩にヨコモゾマコトさん、柳澤潤さんたちがいました。

——所員は当時何名くらいいらしたのでしょうか。

伊東 20名くらい。95年に「せんだいメディアテーク」(2000)のコンペがあったのですが、その前後の時期が、人数も適当で、最も活発に議論が交わされていたという記憶があります。よくしゃべる人が多かった。元気だったのはそこまでかな。最近のみなおとなしくて、元気な奴はめったにいない。

伊東 伊東さんと所員のあいだの年齢差が大きくなって、ストレートな物言い難しいというような要因もあるのではないのでしょうか。

伊東 それもあるかもしれないけれど、総じておとなしい。元氣な奴がひとりいるだけでもまわりが変わってきて、全然違う。それは学校でも同じでしょう。90年代ならば、福島さんが在籍していた頃はよかったです。コンペの勝率もよかったです。日の出の勢い(笑)。

福島 10割とはいわずとも、8割くらいのすごい勝率でしたね。——福島さんは在籍中、どんな仕事をされましたか。

福島 最初に世界都市博覧会のプロジェクトに携わりました。96年春に臨海副都心を舞台にして開催予定だった博覧会です。巨大な会場の中央に直径130mくらいのリング状の大きな建築があって、伊東事務所が設計することになっていたのですが、信

じられないことに入所半年たらずの新人である僕が担当になりました。この建築はほかの施設に先行して進められ、施工会社も決まり、基礎を掘った段階で、95年に中止になってしまいました。

伊東 まさかの出来事だった。建築にかかわっているいろいろなことが起こる。それにしても1年目からいきなりきびしい洗礼を受けたわけだ。

福島 とてもショックでした。でも、その後すぐに大分県のふたつの仕事「大分市野津原支所」(98/8ページ)と「大分アグリカルチャーパーク」(01)をコンペから現場まで担当する機会に恵まれました。野津原は3000㎡くらいの小規模な公共施設、アグリカルチャーパークは農業公園のなかにある7000㎡くらいの県の施設です。

伊東 野津原は私も好きな建築です。アグリカルチャーパークのほうはコンペに当選したのはいいけれど、当時の知事のひとりで、木造の当選案を全面的に見直さざるをえない事態に追い込まれてしまったプロジェクトですね。

ミーティングは 考えることのトレーニング

——入ってみると外からみていたのとはかなり違っていましたか。

福島 伊東さんといえば当時の僕たちにとってはすでに巨匠でしたから、3年くらいは雑巾がけかなと思っていました。模型をつくったり、プランの一部を担当したりというような。

伊東 それがむしろ世の中の通例であったかもしれません。私の同級生が前川国男さんや荻原義信さんの事務所に入りましたが、彼らはチーフの下について修業して7年たって初めて一人前として遇されるとか、来る日も来る日もトイレのタイル割りばかりをやっていたりしましたから。

福島 ところが伊東事務所はまったくそうではなかった。いきなり驚かされたのが、当時いろいろな情報や意見交換の場として所員全員が参加するミーティングがあったのですが、新人の僕が当然最後部でおとなしくしていると、伊東さんから指名で発言を促されたんです。なぜ黙っている、発言しないのだったかここに意味がないと。経験も知識もないので、何をどう話したらよいか皆目不明なのですが、それでもつたない言葉で無理やり話さざるをえない。そうするとそのたびに叱られる。伊東さんとのミーティングは、僕にとって戦場のようなものでした。とにかく自分の言葉で話さないといけない。借り物の言葉では取り上げてもらえない。流行の一般論や歴史的な知識などよりも、今ここで議論していることのほうがず

ポートフォリオはあてにならないので、
直接会ったときの感じ
たいてい決めますね。

Ito Toyo



Special Feature / Master and Apprentice Part 1

いとう・とよお/1941年大韓民国京城市(現ソウル市)生まれ。65年東京大学工学部建築学科卒業。65、69年菊竹清訓建築設計事務所。71年アーバンロ

ポット設立。79年伊東豊雄建築設計事務所に改称。多摩美術大学客員教授、くまもとアートポリス・コミッシヨナー。おもな作品に「シルバーハット」(84/日本建築学会賞(作品))、「八代市立博物館」(91)、「せんだいメデアテック」(2000/日本建築学会賞(作品))、グッドデザイン大賞、「多摩美術大学図書館(八王子キャンパス)」(07)、「アヲ治市伊東豊雄建築ミュージアム」(11)、「台湾大学社会科学部棟」(13)など。ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞、王立英国建築家協会(RIBA)ロイヤルゴールドメダル、朝日賞、高松宮殿下記念世界文化賞、ブリッカラー賞など受賞。

つとおもしろいだからお前はどうか考えるのだと伊東さんにいつも問われていたような気がします。そうした状態が4年間くらいは続いたのでしょうか。とてもきびしかったけれど、後で思うと物事を深く考えることのよいトレーニングでした。

——創作活動にあたってはまず個人間の言語が重要だと。

伊東 建築のアイデアは、さまざまなところ、予想外のところから発することがある。私ひとり考えているのは、毎回同じことにはならず、発展性がないことは明らかです。いろんな人がいろんなことを言いあい、そこからこれはおもしろいかもしれないと思うものを見出し、それを媒介として空間言語に置き換えていく。もちろんそのまま最後まで進むのではなく、何度も繰り返しやり返して、日々変わっていく。その繰り返しで建築の設計にほかならないと思っています。

福島 まず個人それぞれの言語が重要ですが、次にそれが周囲に共有可能なものかどうかを検証するときに、個人性を保ちながら、それを単なる好き嫌いだけで終えてしまうのではなく、ある種の社会性と向きあわせ、その中間に個性と社会性をうまく調停する何かを発見することだと僕なりに解釈しています。それは、自分がやりたいことを一方的に押しつけるのではなく、相手の要望をそのまま受け入れるのでもなく、その両方を軽々と飛び越えていくような理(ことわり)を見出します。伊東さんとのミーティングでも、その理が見出されると、すぐに空間化して共有し、また言語化を繰り返す。でも、この理さえ見失わなければ、個々のデザインに関してはかなり自由がありました。

伊東 コンペティションの場合などは、一方で若いスタッフがプログラムを読み込み、それを図式的に置き換えるとういう組み合わせになるという一般的な回答を用意し、並行してそのコンペのテーマをどう読み解き、考えるかということについて、みなでアイデアを出しあい、意見を重ねていく。それぞれが自分のアイデアが採用されるように必死に高めあう。あ

る程度固まった段階に至ると、4、5人のチームで詰めていくというプロセスです。これが理想だとすると、近年は個人がそれぞれに言語をもち、アイデアを出しあうことが少なくなってきました。いろいろと刺激してみますが、なかなかそうならない。

福島 伊東さんがアイデアを採用しようとする際には、年齢とか経験年数はまったく関係がない。1年目の新人のアイデアでも、おもしろいからこれで行こうということがよくありました。所員にとつても自分のアイデアが取り上げられることが一番の華でした。所員からよいアイデアが出てこないとい東さんがしびれを切らしてスケッチを描いてしまうので、所員は内心忸怩たる思いを抱くことになります。

現場で学ぶこと

——野津原とアグリカルチャーパークでは、実施設計を終えた段階で希望されて現場に行かれたのですか。

福島 そうではありません。たぶん人手がなかったからだと思います。でも、もしかすると当時チームに溶け込む傾向があった僕の性格を伊東さんが見ぬいたうえで、あえて年長者を差し置いてお前が現場に行けと指名されたのかもしれませんが。現場のことは何もわかっていなかったのですが、それも承知のうえでそうされたのかと。

伊東 彼の性格を見きわめてというのはなかったな。なにしろ常時、自転車操業だから、とてもそんな余裕はない(笑)。ともかくお前が行ってこい。でも、それが菊竹流なんです。私は現場にあまり出ませんでした。菊竹事務所では2年目になると現場に出されるのが慣例だった。

——2年目では技術的なこともよくわからないだろうし、よく務まりましたね。

伊東 ノイローゼになったり、胃潰瘍になったりした人もいました。なにしろ菊竹さんは現場に入ってからでも大きな変更を厭わなかったから、毎日が闘争のようなものだったはず。スキーの初心者をいきなり上まで連れて行って突き落とすようなものではないか。それが上達を早める秘訣ともいえます。うちの事務所はそこまでではないですよ。

福島 いえいえ、それはなかなかきびしかったですよ(笑)。事務所とはまた違った難しさがありました。現場監理では経験が乏しいためにここを直したいという意見を通せないことがしばしばあって、僕たちスタッフとしては伊東さんが現場に来たときに、施工者にここを直したいと言ってもらえるとありがたいのですが、伊東さんは「これでよい、これありきで次を



大分市野津原支所
(竣工/1998年)

大分市郊外の国道沿いに立ち、ホームセンターのような外観と神殿のような内観をもつ。その即物的なおおらかさは、伊東事務所の公共建築のなかで異質である。写真/大橋富夫

的に機会を与えて所内の活性化を図ろうとされていたと思います。あいつが現場あるいは海外であれだけがんばっているのだから、ペテランも負けられないというような、競争心を自然に育てる環境をつくっていたのではないのでしょうか。

——9年間で、とてもよいキャリアを積まれたわけですね。

福島 振り返ってみると、本当にそうですね。二度と戻りたくないですが(笑)。学生時代に思っていた伊東事務所の大きな魅力のひとつが、卒業生に建築家として活躍する人が多いことでした。事務所に入って、キャリアを重ねてみて、その秘密の一端がわかったように思います。

考えなさい」と言われることがほとんどでした。それがとても印象に残っています。

伊東 私は細かいことが気にならないタイプだし、多少の不良は現場の出来事だからしかたがないと思うのです。その建築で考えていたことが大きなところでぐずされず、そのままできていけばよくて、現場でもそれしか見ませんね。

——そろそろ独立と思われたきっかけはなんですか。

福島 オランダに建つオフィスの仕事で、1年間、オランダに行かせてもらったことが直接のきっかけになりました。オランダ人と仕事をし、話をしたりしていると、伊東さんから学んだ、個人性と社会性の両者をつなげていくコツみたいなものが日本にいたときよりずっとよく実感できたように思いました。つたない英語でコミュニケーションをとっていたからこそ、逆にそれが可能になったのかもしれませんが。所内でも英語ができない部類に入る僕がなぜと思いましたが、行かせてもらって感謝しています。

伊東 あのと看もとくに意図して派遣したのではなくて、ドタバタのやりくりのなかでだったかと思えますね。

福島 そうはいわれても、若い所員に意図

伊東 結果としてでしょうが、独立して個人事務所を営んでいくよいトレニングの場、予備的な役割を果たしてきたかもしれません。

——石田敏明さん、妹島和世さん、飯村和道さんの世代から始まって、ずいぶん大勢の方々が独立され、活躍されていますね。

伊東 独立後の第一作が話題になるケースはたくさんあるけれども、その後には継続して自分の個性を打ち出していくのはとても難しい。うちの事務所のOBはその点ではがんばっている人が多くて、うれしいことです。困るのは、コンペティションの審査員を務めたとき、事務所のOBが複数名、最終インタビューに残っていたりする場合ですね。うれしいともいえませんが、推すこともできないので、困惑します。

——そのなかで福島さんのことはどう評されますか。

伊東 律儀な人。さすががしく気持ちがいい人。ストレート一本で、あまりカーブは投げない。

福島 ストレートしか投げられないんですよ。伊東さんが、ここはカーブを投げるとサインを送ってくれる場面があっても、それでも投げられなくて、ストレート勝負を挑んでホームランを打ち返されてしまうことがたびたびありました(笑)。

「柱と床」の評価

——ところで、福島さんの作品「柱と床」はいかがですか。

伊東 彼の性格が反映されていて、てらいがなく、気持ちがいいというのが第一印象です。独立後の最初の作品である「中国木材名古屋事業所」(04)を見たときも、同じような印象をもちました。うまく表現できないのですが、あらゆる点で正攻法できちっとしている。

構成の点では、東京の密集地の住まい方として、1階の土間の空間が特徴的ですごくよいと思いました。子どもたちの遊び場としてもとてもよい

「柱と床」は、
1階の土間の空間が特徴的で
すごくよいと思いました。

Ito Toyo

空間だし、いずれ成長したら、子どもの拠点があそこに移っていくのかもしれない。

福島 お施主さんも、そう考えていらっしやるようです。住み手として丁寧さとたくましさもあわせているご家族で、打ち合わせの段階からとても刺激を受けました。

伊東 若い人の設計した住宅について最近はどういけれど、この住宅はどう位置づけられているの。

福島 前の「e-HOUSE」(06)と比較すると、大方は時流からはずれているというか、風変わりな住宅と位置づけられているのではないでしょうか。「e-HOUSE」はすべての壁が折り紙のようになっていて、時代に寄り添っているとみられたのか、驚くくらいの高い評価を得ました。雑誌、テレビなどあらゆるメディアに取り上げられました。だからこそ、時代に寄り添いすぎることには危機感を抱いたのです。今回は自分の個性は何かということを考え抜いて、コンクリートのグリッドフレームで床を支え、その上に木造のペントハウスをのせるという、一種の建築の原型のような形式に到達しました。「柱と床」というタイトルを採用したのも、そうしたい思いからです。でも竣工直後に見に来た人たちは一様に「よくわからない」と戸惑っていました。評価されるようになったのは2、3年たってからで、2009年の東京建築士会主催「住宅建築賞」の金賞をいただきました。その際も、1階の空間がとくに評価されたようです。

伊東 室内にものがいくら出てきても気にならないのはいいですね。コンクリートのフレームのためでもあるし、それがいい3階の空間にしてもそうなっている。ゆったりとしていて、包容力があるというのか、よい意味での冗長性があるというか。

もちろん私とは異なるアプローチであり、スタイルですが、この住宅をひとつの基点として、さらに活躍の場を広げてほしいと望みます。福島 師と異なる作風の弟子が育つのが、伊東事務所のすごいところですね。そのなかでも、僕は伊東さんから一番遠いところにいます。だからこそ、今なお伊東さんから大きな刺激を受けていますし、願わくば伊東さんに影響を与えるような存在でありたいと思っています。今日は12年前の伊東事務所卒業の追試を受けるような緊張感がありました。なんとか合格点を与えていただけたのでしょうか。これを励みにいつそう精進していきます。どうもありがとうございます。

「柱と床」

設計 福島加津也 + 富永祥子



1階の土間。柱、梁、床、すべてがコンクリートで仕上げなし。天井が高く、がらんとしている。独立した柱が空間をゆるやかに規定している。

建築の原型を目指す



Special Feature / Master and Apprentice Part 1

切り取られた断面のようでもあり、
逆にまた、自身が基点となって、
より大きなスケールの構築物へと成長していく
強い意志を秘めた種子のようにもみえる。

取材・文／伊藤公文 写真／傍島利浩



壁の合板以外はすべてコンクリート。空間は可動家具でゆるく分割されている。突き当たりに中庭を介して浴室。

↑ 2F 寝室

1F 土間 ↓



左手が入り口の大きな開口。靴脱ぎはなく、土間から急な階段で2階に上がる。壁は施主の手で後から白く塗装された。

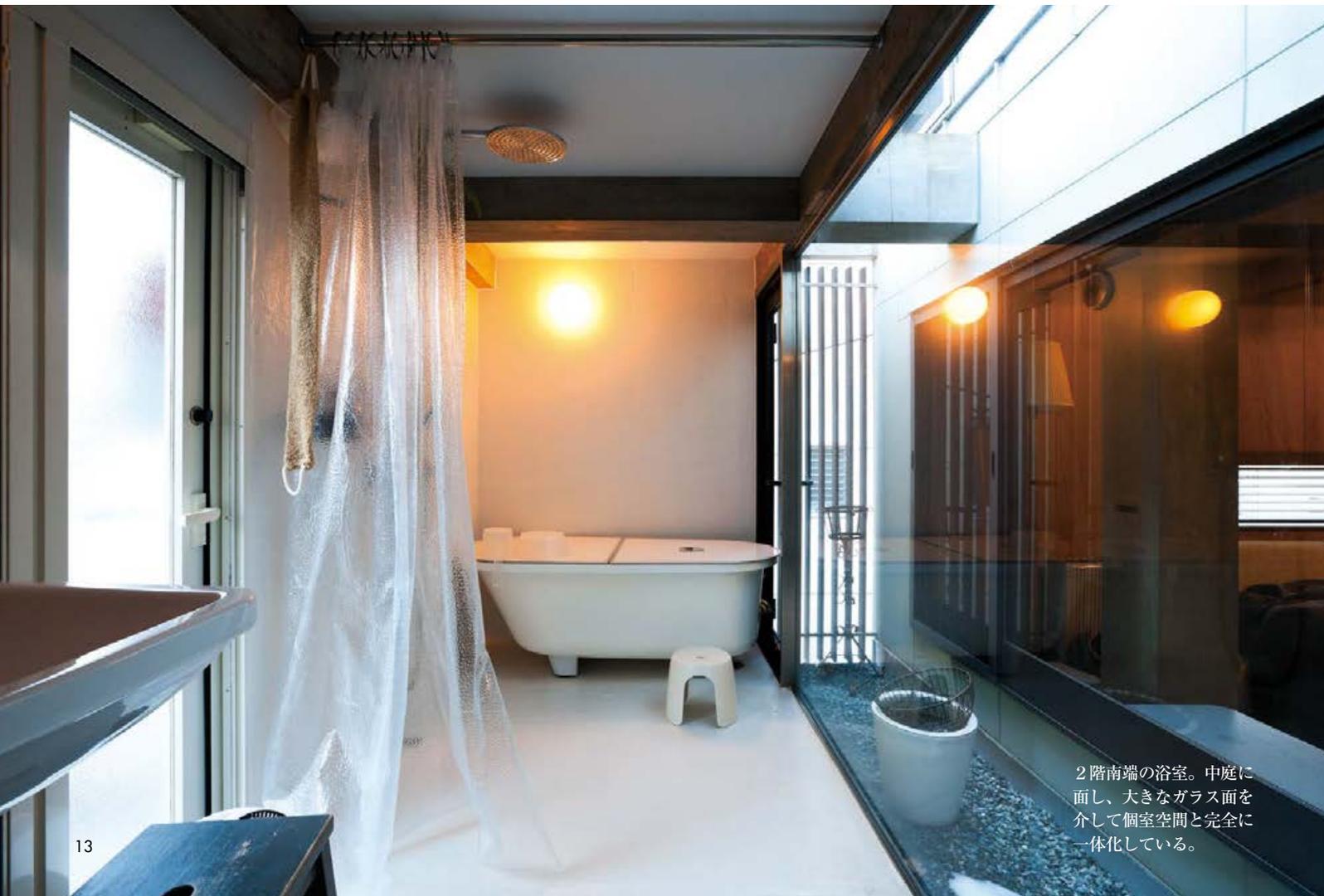
2階北側。現在は子ども
2人の寝室となっている。
300×300mmのコンクリ
ートの柱が領域をゆるく形
成している。



↑ 2F 子ども部屋

Special Feature / Master and Apprentice Part 1

2F 浴室 ↓



2階南端の浴室。中庭に
面し、大きなガラス面を
介して個室空間と完全に
一体化している。



3F 食堂



3F 食堂

名は体を表す

「柱と床」。

住宅のタイトルとして、これ以上はない直截さだ。名は体を表すというが、まさにそのとおり。2600×3020mmのグリッド上に高さ5・4mのコンクリートの柱が8本、整然と立ち並び、梁が縦横に架かり、2枚の床スラブを支える。上方の床の上には木造の箱がのる。間口4・5m、奥行き9mの平面、3階建ての、紛れようがなく明瞭な構成。

写真右／3階の食堂から南側のベランダ（上庭）方向を見る。明るく軽やかな空間。左／3階の室内。中央のキッチンにコンクリートが痕跡のように現れている。

もちろん住むための空間だから、コンクリートの柱も木造の軸組みも、ほとんどは外皮に覆われているが、「柱と床」はファサードにもはつきりと現れている。1階と2階で、柱型、梁型、床スラブが外に突出、もしくは断面を露わにして、構造躯体の全容が明示されているのである。そのためこの住宅は、より大きな全体から切り取られた断片であるかのような未完成感を強く漂わせているし、逆にまた、自身が基点となつて、より大きなスケールの構築物へと成長していく強い意志を秘めた種子のようにもみえる。こういうと、構造躯体がいかに力強い表

階段

1階から3階へ上がる鉄砲階段。もちろん「柱と床」の構成を乱さないように、清潔なコンクリート。



1階は仕上げを省いたコンクリート剥き出しの土間で、柱は両端の壁面から950mmほど内側に立っている。柱を通例のように外壁面に寄せて立てなかつたのは構造上の理由もあるが、それにも増して柱の内側を人が活動する空間、外側をゆるやかに規定する装置としたからだという。実際、こ

現を呈しているようだが、実際にはコンクリートの躯体が、ガルバリウム鋼板の波板や注意深く設けられた開口部などと質感もスケール感も連続している、全体として大きな家具のような繊細な姿になっている。設計者は「掘立て柱と高床という日本住宅の歴史的形式」を発想のひとつとしてしているが、様相はだいぶ違う。「掘立て柱と高床」の豪放、強剛なイメージに代わって、ここでは、ミリ単位の精密な寸法調整を伴う細やかな感覚が全体を支配し、やさしくやわらかな気配がすみずみまで行き渡っているのである。

その感覚は、室内に入るといっそう強まる。3階に上がると一転して明るく軽やかなダイニングキッチンの空間が現れる。柱はなく、天井は高く、南に大きな開口があり、その先のベランダ越しに視線が伸びる。典型的なベントハウスの構えだ。このように小規模ながら階ごとに著しく様相を異にするこの住宅は、きわめて精密につくられながら、住み手の自由度を規制せず、住み手の自発的な改修・改造をも導くような仕掛けを内包した、とても豊かな器になりえている。

れから先、大工仕事を厭わない施主の手によって、柱を媒介に壁や家具が増設され、使われ方が変化していくことも大いにありそうだし、そう期待されてもいる。それにしても荒々しさが一片もない。おおらかで居心地がよい空間だ。大きな引き戸を介して道路からまっすぐに通り抜ける単純な構成、2850mmの高い天井高、300×350mmの細身の柱、片側に連なる高窓。これらが織りなすハーモニーのゆえなのだろうか。2階は可動家具でゆるく分割されている個室空間で、細い中庭を介し浴室が配されている。柱はさらに細く300×300mm、天井高が低く、開口が少なく、落ち着いた雰囲気の間となつている。

柱と床

建築概要

所在地	東京都
主要用途	専用住宅
家族構成	4人
設計	福島加津也+富永祥子建築設計事務所
構造設計	多田脩二構造設計事務所
施工	前川建設
敷地面積	76.72㎡
建築面積	40.77㎡
延床面積	105.63㎡
階数	地上3階
構造	鉄筋コンクリートラーメン構造、一部木造
設計期間	2007年3月～10月
施工期間	2007年11月～2008年4月

おもな外部仕上げ

屋根	ガルバリウム鋼板
外壁	カラーガルバリウム鋼板
開口部	木製サッシ ステンレスサッシ アルミサッシ
外構	碎石敷き

おもな内部仕上げ

土間	
床	コンクリート木ごて均し
壁	ラワン合板 t=4mm 素地
天井	コンクリート打放し(打放し型枠)
寝室・子ども部屋	
床	コンクリート金ごて均し コンクリートワックス塗布
壁	ラワン合板 t=4mm 素地
天井	コンクリート打放し(打放し型枠)
浴室	
床・壁	FRP防水
天井	ケイカル板 t=6mm VP
食堂	
床	寄木張りフローリング t=15mm
壁	石膏ボード t=15mm AEP
天井	石膏ボード t=12.5mm AEP

福島加津也

Fukushima Katsuya

1968年神奈川県生まれ。90年武蔵工業大学工学部建築学科卒業。93年東京藝術大学大学院美術研究科修了。94～2002年伊東豊雄建築設計事務所。03年福島加津也+富永祥子建築設計事務所共同設立。現在、東京都市大学工学部建築学科講師。

富永祥子

Tominaga Hiroko

1967年福岡県生まれ。90年東京藝術大学美術学部建築科卒業。92年東京藝術大学大学院美術研究科修了。92～2002年香山壽夫建築研究所。03年福島加津也+富永祥子建築設計事務所共同設立。現在、工学院大学建築学部建築デザイン学科准教授。

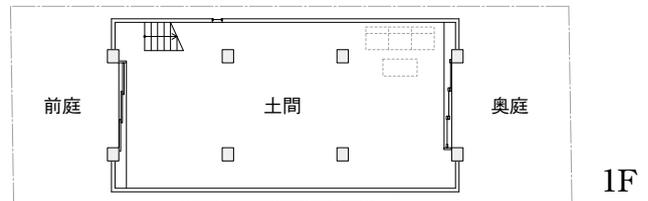
おもな 作品と 著書

「中国木材名古屋事業所」(04/04年JIA 新人賞、06年 American wood Design Awards)、「e-HOUSE」(06)、「s-HOUSE」(06)、「木の構築Ⅰ」(13)、「木の構築Ⅱ」(13)など。おもな著書に『今和次郎「日本の民家」再訪』(共著/平凡社)、『現代住宅の「ディテール」』(共著/彰国社)がある。

平面図

1/200 N

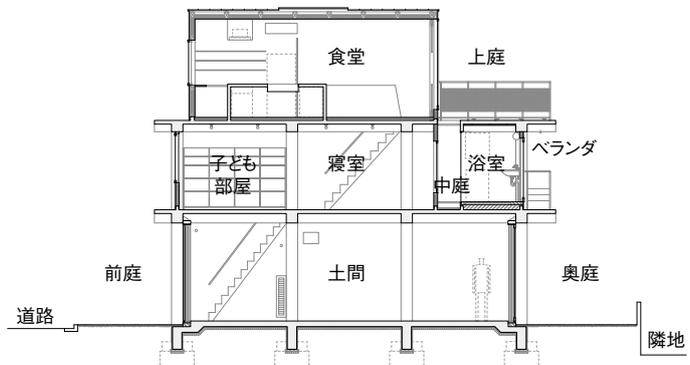
0 1 2m



断面図

1/200

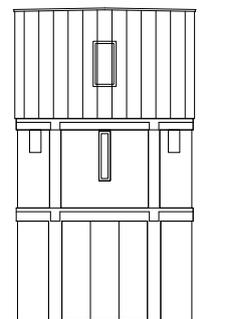
0 1 2m



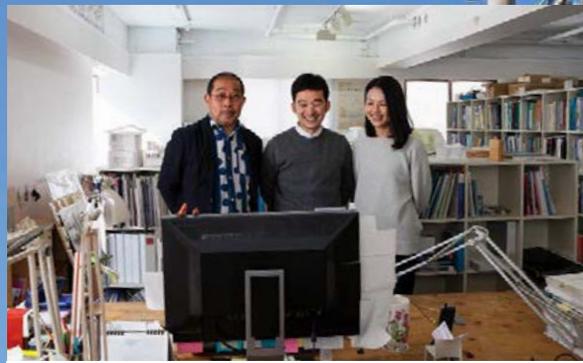
北側正面図

1/200

0 1 2m



「N邸」の東側外観。まわりの敷地とは高低差があり、手前は1階分ほど落ちている。ほぼ同じ規模の住宅が建ち並ぶ。写真右／青木淳建築計画事務所にて。



Aoki Jun Murayama Toru + Kato Ayako



Special Feature
Master
and
Apprentice

Part
2

Aoki Jun
Murayama Toru
Kato Ayako



青木 淳

師

大学院の課題を通して
青木淳さんを
よく知るところとなった村山徹さん。
なんとか存在を知ってもらおうと、
青木さんが審査員を務める
コンペに応募しつづけたという。

まとめ／豊田正弘 写真／藤塚光政

特集／師と弟子／2

座談会

4年で
独立する
ための
日々

弟子

村山 徹

(十加藤亜矢子)

シンメトリーというルール

——青木さんは「N邸」をご覧になってどんな感想をもちましたか。

青木 淳 パツと見て、建ち方がいいなあと思った。まわりは同じような敷地で、外形にかかわる法規も同じだから、ほぼ同じ形のもので建つ。でも「N邸」は無理がなく、ちょっと小さく建っている。

外観は完全なシンメトリーで、中へ入るとさらに前後の……、つまり2軸シンメトリーですね。非常に構成がわかりやすく、悪くいえば図式的なみだけれど、見た印象はそれを感じない。そのギャップが一番いいところかと思いました。

村山 徹 クライアントから白い家という要望があったので、まわりと同じボリウムすると膨張して大きく見えてしまいます。また突出しないように、なるべく普通の素材、普通の仕上げを使うように考えました。

シンメトリーについては、敷地の第一印象が東側に抜けていることだったので、西側のファサードも同じ顔にしてどちらの眺望も生かすことにしました。街並みにきちんと合わせた建ち方をしないとイケないと思っています。外観への意識は強くもっています。

加藤 重矢子 補足すると、ここで私たちがはじめにつくったルールがシンメトリーでした。でも村山君経由で青木さんから学んだこととして、「ルールをつくっても、それを100%守る必要はない」というのがあります。だから階段やキッチンはベストと思われる場所に置いていて、それによって実際にはあまりシンメトリーを感じさせないのかもしれない。

青木 ルールというか全体を統御するものと、建築の空間がもつ質とがどういう関係にあればいいのか。それはいまだに僕もわからない。

村山 一般的にルールをつくると、それに忠実につくるためにゴールを設定してそこに向かっていきますよね。つまり「マラソン」のように、遠くでも目標が決まっているものですが、青木事務所のやり方は「散歩」で、距離は同じでも目的地はない。そこがいいなと思います。

加藤 ここではつくりたい質を実現するために、この場所にどういうあり方をするのがベストなのか、一つひとつのディテールを判断しました。その集合体としてよい質のものができると考えたんです。

青木 アップルのステイプ・ジョブズが iPod（*）をつくらうとしたとき、彼の頭のなかでは、そのある生活が価値観をどう変えるかとかその哲学までみえていたと思う。でも iPod がない時代に、まわりにそれを説明しても絶対に通じない。だからとにかく、iPod というものをつくらうと言ったわけですね。「N邸」でいえば、こういう条件があるから

見てわからない案は
ダメですね。

Aoki Jun



シンメトリーを大事につくりましょうという話は、村山君と加藤さんのあいだで通じるし、またクライアントにも通じる。

質というのはものに備わっているというより、それを見て人が感じることですよね。ではここで質をつくっているものは、なんだと思いますか。

加藤 膨大にあると思いますが、たとえば光がどう入っているか。

青木 うん、それは大きいよね。出窓ふうになった妻側の開口部は、開放感があつて外とつながっている感じが一方で、わりと腰壁が高い。トラックの運転席みたいな（笑）安心感があつて、バランスがいいと思う。

加藤 きちんとデザインしすぎると人に緊張感を与えるので、そうならない程度に寸法に気を配っています。

青木 それはよくわかります。そういうつくり方の積み重ねで、固さや表現意図が自然に消えているね。

少ない担当者が全力を尽くす

——村山さんが青木事務所に入ったときのお話をうかがいます。

青木 村山君のポートフォリオでおもしろかったのは美術館の計画で、島みたいな場所をつくと人が自由になって云々と説明してくれた。

村山 ああ、恥ずかしい（笑）。

青木 形式としてどうつくるかということ、その形式をもつと人間のアクティビティがどうなるかということがまるで当然のようにつながっていた。でも人間はアリのじやないから、砂糖を置いたら集まるといものじやない（笑）。大丈夫かなあと思いましたが、一生懸命やっているのは伝わってきた。

設計では現場にどうスタッフを置くかという問題があつて、うちの場合はすごく少ないんです。人が増えるとコミュニケーションのロスが大きくなるから、少ない人数でそれぞれが全力を尽くしたほうが良いと思っています。僕は磯崎新さんの事務所「水戸芸術館」（1989）の現場を担当しま

したが、施工図チェックは全部ひとりで行った。それで「青森県立美術館」(2006/20ページ)の現場にもふたりしか行っていなかった。ただ、ふたりではどうしても足りない側面が出てきて、それがトイレとサインと照明でした。とくにトイレが問題だったので、村山君が入所して、「修業」を兼ねて現場に行くようにと。1年半くらい、トイレのスタディをしていたよ。

村山 手洗器の原寸模型とか、いろんなものをつくってました。

案を説明する機会は与えない

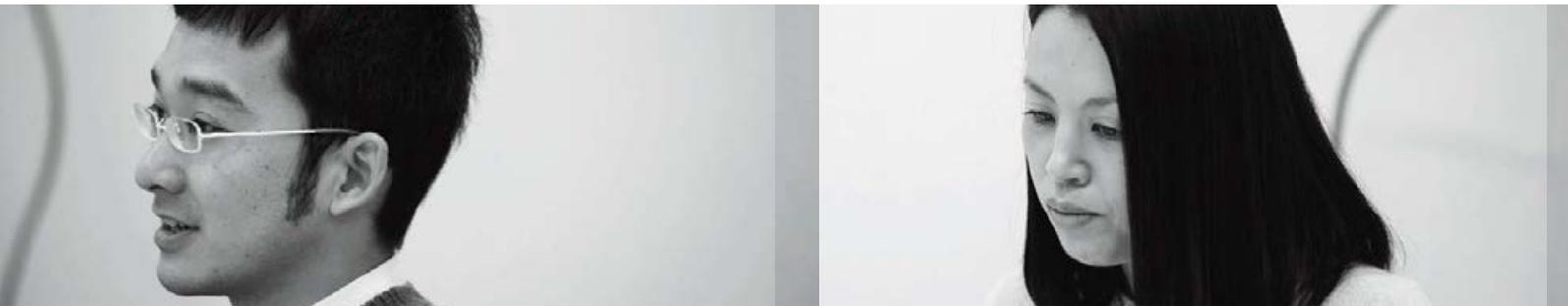
——青木事務所を目指したきっかけはなんでしたか。

村山 大学院の授業で青木さんのことを調べるという課題があつて(笑)、青木さんのテキストをすべて、3週間くらい読みつづけたらすごくおもしろかった。また、ちょうど乾久美子さんと永山祐子さんが魅力的なデビューを発表された頃で、ふたりとも青木事務所の出身だった。僕は関西にいたから簡単に会えないし、情報も入ってこないで、存在を知ってもらおうと、青木さんが審査員を務めるコンペにはとにかく応募しました。全然、引つかからないんですが、ポートフォリオを送ったときは「見たことがあるよ」と言ってもらえた。なんともかみぐり込みましたが、最初は大変でした。青木 大変だったかもね。価値観が学校とは全然違って、急に本番という感じだもの。ここでの仕事は「じゃあ、考えて」というスタートは学校と同じだけれど、案をもつてきても、ほとんど図面を見ないで、模型を一瞬見て「ダメ」とか。なんでこうやったとか、説明の機会はなし、説明を始める人もいりけれど、「そんなこと聞いてない」と。

良いか悪いかはわかりませんが、僕はそれぞれの人の裏側のそれぞれの物語には興味がない。たとえば村山君の人生観を聞いても、精神分析みたいにしかならないからいやなんです。打ち合わせで「これはおもしろそうだね。どうやったら、もっとおもしろくなるだろう」という話はしますが、見てわからなかったらダメですね。

村山 よく言うのは、青木さんがつくる建築は、目に見えないことをやっている。目に見えるディテールがきれいだとかいうゴールではなくて、その空間の質が重要なんです。それは打ち合わせや模型をつくる段階から、そういう質になるかどうかを青木さんは見ているのだと思います。

現場のすべてをコントロールする



Special Feature / Master and Apprentice Part 2

写真左・むらやま・とるお / 1978年大阪府生まれ。04年神戸芸術工科大学大学院修士課程修了。2004〜12年青木建築設計事務所勤務。10年加藤並矢子とムトカ建築事務所共同設立。写真右・かとう・あやこ。

現場では
自分たちスタッフだけで
いかに進められるかを
考えます。

Murayama Toru

入ってから4年で独立しないとイケない。そのあいだで学ぶには、自分だけ何ができるかを考えるようになりました。

誰にも聞かず自分で調べる

——4年制について聞かせてください。

青木 まず4年間くらいがそのスタッフと僕が同化しないギリギリだと思えます。それ以上たつと、僕の言うこととか、僕が何をしたいかがだいたいわかる。僕の限界もみえてくるだろうし(笑)、逆にこっちもスタッフのできることがわかってくる。やりやすくはなるけれど、それはなれあいなんです。労働として設計をやりたいわけではなくて、おもしろいのでやっているわけですから、事務所の人間関係が固定化されるのは避けたい。4年制のプラス面は、事務所に新しい血が入ってくるから新鮮に仕事に取り組めること。もちろんマイナス面は、蓄積されなくて大変というのがある。それで以前は、だいたい4年でふたつの仕事ができただけなんです。最初は誰かの手伝いとして2年くらいサブで入り、その人がメインとなる仕事に

——具体的には、青木事務所の修業時代はどんなことを考えていましたか。

村山 「青森県立美術館」では、青木さんはいかに出さずに、スタッフ3人の力で進められるかと話しあっていました。公共建築なのでトップ同士が話せばすんなり決まっていきましたが、それでは僕たちの力にならないから。

青木 「虎の威を借る狐」になってはいけないということですね。スタッフが人を説得できないとダメなんです。

僕も磯崎さんのところでは、それをやりました。「水戸芸術館」の現場では、役所へも施工者へも、僕のレベルでほぼ決めて通したんです。そうすると矢面に立たざるをえないし大変だけれど、勉強になるよね。磯崎さんも、出てこないで思いどおりのものができていくから楽しいじゃないですか。だから途中からは少し評価してもらえた。

村山 青木事務所は当時から「4年制」で、

2年くらいかわる。それが最近の仕事のベースが不規則でズレることが多い。村山君の場合も「青森県立美術館」はいきなり現場に行つてトイレとサインが中心だった。「m」(2013)という住宅を最初から担当したけれど途中で止まったりしたから、結局何年いたんだっけ？

村山 合計8年ですね。僕が入ったときは10数人のスタッフがいましたが、ひとりがひとつのプロジェクトをもっていた。だから誰にも聞けない状況で、なにごと全部、自分で調べると言われて四苦八苦していました。それぞれが自分のことをやっているから、じゃまをしてはいけないという感じ。すごいところだなあと感じました。

青木 そうやって育つんです(笑)。

スタッフが案をつくる

——青木さんの師匠にあたる磯崎新さんから、青木さんのスタッフへとながっていくものはありますか。

青木 磯崎さんの師匠は丹下健三さんですね。丹下さん、磯崎さんとながつてくるのは、模型というものの存在が大きいと思う。磯崎さんも最終的な判断に模型を使うことが多かった。僕たちはなるべく大きい模型をつくって、それを見てもらった。だから建築そのものに関する考えは違っても、建築の判断を模型ですという伝統があると思います。

つながつていないほうはもつと簡単で(笑)、磯崎さんは全部自分で決める人だから、スタッフがアイデアを出せないんです。僕が入ったときにそれがわからなくて、僕が描いたスケッチを机に置くんですが、それを見てくれないで横に置いて、自分で描きはじめる。つまり磯崎さんがその場で描くことがすべての出発点になる。それをどう解釈していくのかが僕の仕事だけれど、結局、事務所にした7年間、アイデアは出せないものと思っていた。これはすごい問題で、やはりスタッフが考えて、そのスタッフの案に対して僕がもつといい案を考えて、とやっていかなない限り、ダメだと僕は思った。だからうちの事務所では、磯崎さんを反面教師として、案はスタッフがつくらなくてはいいくないということになりました。

加藤 それはスタッフのことを考えてですか。

青木 それ半分。後半分は、そのほうがいい案ができるだろうと思つたから。僕が楽になるわけではないですよ。案を考えたときに、ボスのほうがいい案を考えるんだなというくやしさが無い限りダメだし、うちにいる意味がないじゃないですか。

青森県立美術館

(竣工/2006年)

青木淳の設計により三内丸山遺跡の脇に立つ。上向きに凸凹した大地の切れ目に下向きに凸凹した白い構築体がかぶさった構成で、展示室は地下2階と地下1階にある。
写真/阿野太一



——青木さんは独立した人の作品をご覧になりますか。
青木 オープンハウスなどは基本的に行きたいと思つています。以前はうちで設計した建物ができるまでO Bのみんなにも見てもらい、その後飲みに行つていろいろ話をしました。去年は新年会をやりましたが、けっこう集まったよね。

村山 全部で30人くらい。O Bと現役が半々という感じでした。

青木 それぞれに自分のやっていることを発表してもらつたら、午後3時から始めて夜中過ぎまでかかった。うちはみんなバラバラで仕事をしているから、仲が悪くならないよね。むしろO Bになつても、「つらかったねー」という共通した感慨がある(笑)。

設計の仕事が続ける覚悟

——青木事務所に入所させる基準はありますか。

青木 どこも同じだと思つますが、まずポートフォリオを送ってもらう。それを見て可能性があると思う人には会うんですが、それがまずすごく少ないです。年間3桁くらいの人からアプラインがあつて、そのうち会う人は1桁ですね。そこで面接をして、まだ可能性があると思つたら、1カ月間アルバイトをしてみよう。そこでまただいたい減ります。

小さい事務所だから、うまく溶け込めるか、ここに合うかということも大事で、合うのは一生懸命に設計そのものにのめり込める人だと思つ。やはり設計していれば深みに入つてしまうわけです。とにかくねちっこく、最後まで考え抜くことがふつうにできそうな人をとっているようです。

でもたとえ、一緒にクライアントのところへ行くとき、1分でも遅れたらその場でクビです。僕は時間を守るのは最低限のことだと思つから。

村山 ある人が言うには、青木事務所は一芸入試みたいなものだ。一芸に秀でている人ばかりで、平均的に優秀なやつはいない。

青木 ああ、それはそうだ。

村山 自分から途中で辞めるといふ人はいませんね。

青木 うちで働いても4年後には仕事はなくなる。その時点でどちらにせよクビになるわけだから失業する。設計というのはそこから初めて仕事ができるのであつて、ベースは失業状態(笑)。その状態をずっとやっていく覚悟がありますか、ということですね。失業はいやだという人は、違う会社に入つたり、違う仕事をしたほうがいい。でもその覚悟があれば、うちの4年間を有意義にすごせると思つんです。

作品

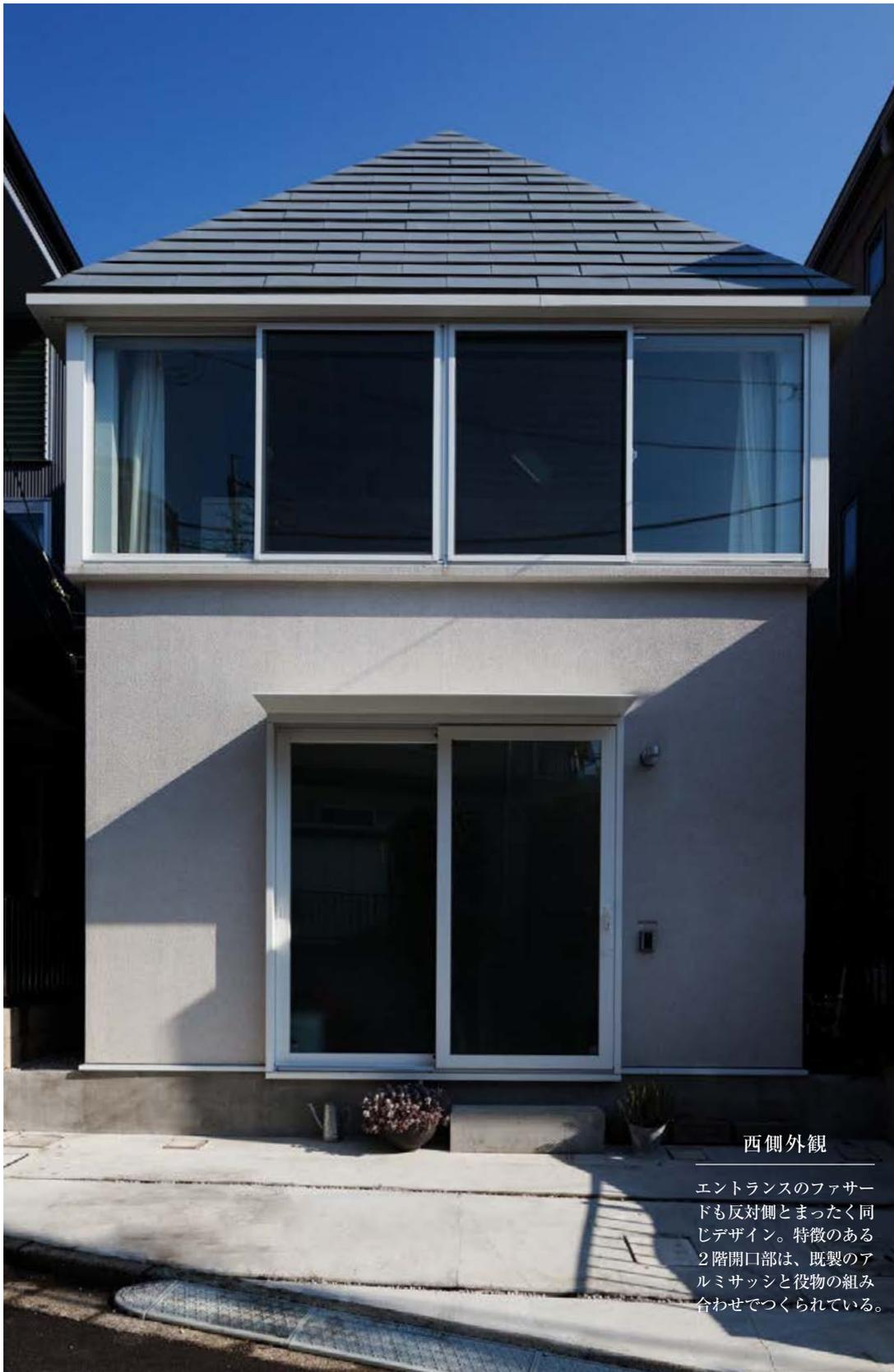
「N邸」

設計 村山 徹 + 加藤亜矢子



Kato Ayako

過剰なシンプルさ



西側外観

エントランスのファサードも反対側とまったく同じデザイン。特徴のある2階開口部は、既製のアルミサッシと役物の組み合わせでつくられている。

街並みのなかで、
奇をてらうことなく、
しかし愛敬のあるたたずまい。

取材・文／豊田正弘 写真／藤塚光政



写真右／ロフトから連続するルーム4の吹抜け。中／コの字に曲げたスチールの段板の小口に手すり子を溶接。それは2階手すりの手すり子も兼ねる。美しさとコストを両立させたデザイン。左／水まわり、ルーム2側を見る。引き戸を閉じた壁面は天地・左右ともにシンメトリー。

ルーム1

螺旋階段

ロフト階



普通のを徹底してコントロールし、
全体をまとめることが、
今の時代の新しさではないか。



ルーム3よりキッチン・
ロフト越しにルーム4を
見通す。

きつちりと

シンメトリーな外観

現地を訪れる前から、その資料を見て「本当だろうか」と何度もつぶやいていた。一般に都市型住宅というものは、多数の条件や制約のもとに成立している。限りある面積と予算のなかでクライアントの快適な生活を得るため、設計者はさまざまな手法を駆使することが求められる。ところが「N邸」の構成は、そんな苦勞をまったく感じさせないほどにシンプルなのである。眺望の開けた東側とアプローチのある西側とは、左右対称でまったく同じファ



ルーム 3+キッチン+ルーム 4

きれいに見せることで
使いにくくなっているものには、
すごく違和感がある。

写真上／2階北側の壁面を見る。東西の開口が大きくまわり込むことで豊かな光量を得ている。淡いグレーの壁面に、白く塗られたアンティーク家具が映える。

サード。インテリアの壁や引き戸の位置もシンメトリー。エントランス（ルーム1）とベッドルーム（ルーム2）が同じ大きさ。2階の東西にあるリビングも同様。そんなことがありえるのか。しかし設計者のふたりに案内されるうち、その意味がわかってきた。

三角屋根と大きな窓

東京近郊の丘陵地に広がる典型的な住宅地。東西に細長い敷地の両面に、「N邸」はじつに不思議で魅力的な姿を見せる。子どもが描く家型を忠実にトレスしたような矩勾配の三角屋根と、大きなサンングラスでもかけたように少

し張り出して左右にまわり込む窓。それはいわゆるデザイン住宅的なスタイルを誇示することなく、また斜線制限の影響を感じさせることもなく、ちんまりとかわいらしく立つ。

もともと建て売りを購入する予定だったクライアントからの設計依頼。「3階建て、100㎡、バルコニー付き」という要望には予算がきびしく、2階建てでロフトを設け、東西にバルコニー的な部屋をつくることを考えたそう。シンプル素材や構成がコストダウンにつながっていることはいまでもない。

2階の大きな開口部は、この住宅を最も強く印象づけている。高さ1500mmの住宅用既製サッシが、外壁から100mmだけ突き出して三方に連続し、その下に高さ800mmの腰壁がある。外部を引き込んであふれる光と、足元を包むように守られる感じとのバランスが絶妙だ。サッシはこの見付け幅でつくることができる最大寸法。枠まわりを見ると、上框は塗り込んで壁に溶け込ませ、下框は小口を見せて窓台らしさを控えめに主張している。

判断の 積み重ねで 得られた質

この住宅ではあらゆる要素が、驚くほど慎重に検討を加えたうえで決定されている。その根拠は「バランスをと



ルーム 4 の窓枠



ルーム 1 引き戸の引き手

写真右／カーテンウォールのように柱の外側をサッシがまわり、小さな窓台をつくる。左／市販のモールディングを上下に重ねたもの。

ること」「フィットしていること」「つくり込みすぎないこと」にあるという。それは実際の空間に身を置いてみると、文字通り体感できる。緊張することなく心地よい生活をするための配慮に満ちているのだ。

前記の開口部のほか、たとえば1階と2階のつくり方。1階を極端に圧縮して2階をとくに開放的にコントロールを強くデザインしがちなところだが、ここではグレーのペンキの濃淡によりそれを表現している。

そしてシンプルな構成は、住宅以外の用途に発展することも意識していたという。取材当日、「今の夢はここにキッズスペースをつくることなんです」というクライアントの奥さまの言葉は、設計者を大いに喜ばせた。

N邸

建築概要

所在地	神奈川県川崎市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	村山徹+加藤亜矢子 /ムトカ建築事務所
構造設計	ハシゴタカ建築設計事務所
施工	クマイ商店
敷地面積	71.72㎡
建築面積	39.15㎡
延床面積	78.30㎡
階数	地上2階
構造	木造在来工法
設計期間	2011年11月~2012年9月
施工期間	2012年10月~2013年3月

おもな外部仕上げ

屋根	ガルバリウム鋼板
外壁	弾性リシン吹付け
開口部	アルミサッシ 木製サッシ
外構	コンクリート金ごて押え 砂利

おもな内部仕上げ

ルーム1	
床	コンクリート金ごて押え 撥水剤
壁	PB t=12.5mm EP
天井	PB t=9.5mm EP
ルーム2	
床	シナ合板 t=5.5mm 着色塗装 ウレタンクリア
壁	PB t=12.5mm EP
天井	PB t=9.5mm EP
サニタリー	
床	長尺塩ビシート t=2.5mm
壁	PB t=12.5mm EP
天井	PB t=9.5mm EP
トイレ	
床	長尺塩ビシート t=2.5mm
壁	PB t=12.5mm EP
天井	PB t=9.5mm EP
クロゼット	
床	長尺塩ビシート t=2.5mm
壁	PB t=12.5mm EP
天井	PB t=9.5mm EP
ルーム3+4	
床	シナ合板 t=5.5mm 着色塗装 ウレタンクリア
壁	PB t=12.5mm EP
天井	PB t=9.5mm EP
キッチン	
床	シナ合板 t=5.5mm 着色塗装 ウレタンクリア
壁	PB t=12.5mm EP
天井	タモ練付けMDF t=4.3mm EP
ロフト	
床	タイルカーペット t=6.5mm
天井	PB t=9.5mm EP

村山 徹

Murayama Toru

1978年大阪府生まれ。2004年神戸芸術工科大学大学院修士課程修了。04~12年青木淳建築計画事務所勤務。10年加藤亜矢子とムトカ建築事務所共同設立。作品に「N邸」(13)、「tsugiki」(12/リノベーション)がある (ともに加藤亜矢子と共同設計)。

加藤亜矢子

Kato Ayako

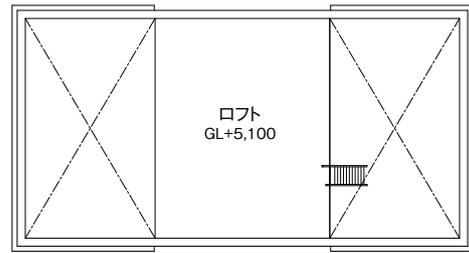
1977年神奈川県生まれ。2004年大阪市立大学大学院前期博士課程修了。04~08年山本理顕設計工場勤務。10年村山徹とムトカ建築事務所共同設立。現在、東京大学特任研究員、大阪市立大学非常勤講師。

平面図

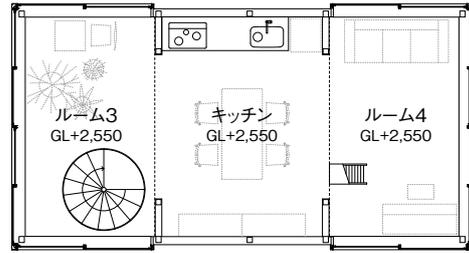
1/150



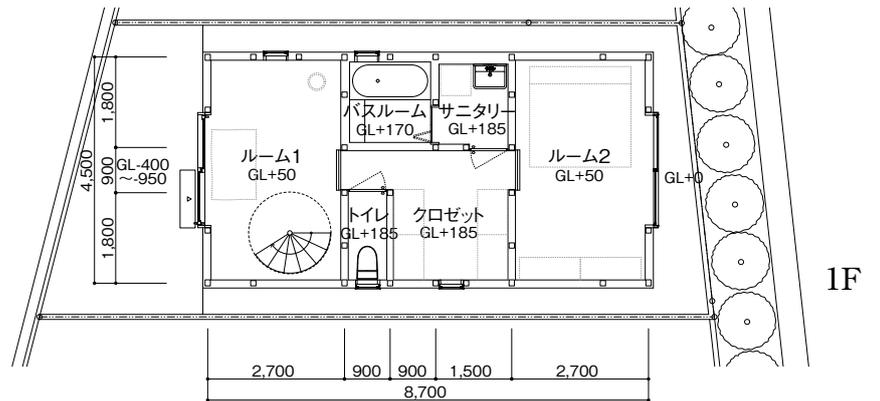
0 1 2m



Loft



2F

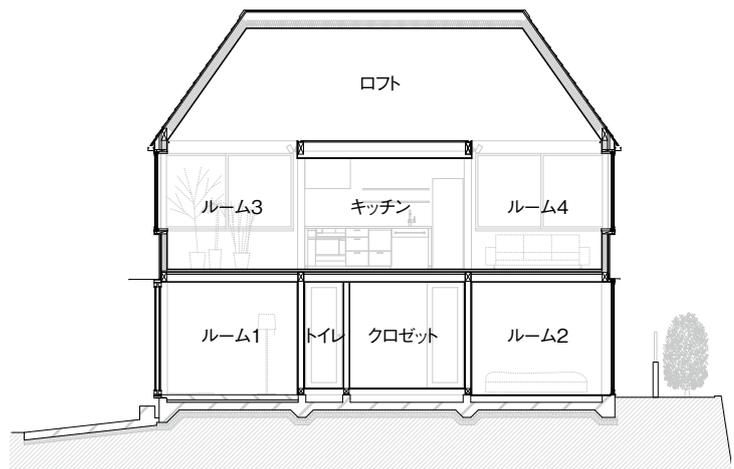


1F

断面図

1/150

0 1 2m



Takehara Yoshiji

Yada Asashi

Special Feature
Master
and
Apprentice

Part
3



Takehara Yoshiji
Yada Asashi

「ES house-02」の外室。
光・風・音などの自然を
適度にコントロールして
取り込む。

竹原義二

師

特集／師と弟子／3

対談

建築に
向かう
姿勢を
継承する

弟子

矢田朝士

社会をわかっていない
青年だった矢田朝士さん。
でも話をすると、
ものを見る視点が鋭く魅力があったと、
竹原義二さんは言う。

まとめ／豊田正弘 写真／川辺明伸

クライアントに愛される家

——竹原さんに「E S h o u s e 102」の感想をうかがいます。

竹原義二 クライアントがとていいですよ。家を愛している。今日はすごく寒けれど、朝ご主人とお会いして話をしても、そういう文句は言わない。この住宅は、家族の誰かが「寒くていやだ」とか言い出せば成り立たないですから。季節がめぐることを知っていて、住みこなされているんです。僕の家（自邸「101番目の家」(2002)）も外部を取り込んでいるから、よくわかります。矢田君の「E S h o u s e 101」(05)は郊外に立つ平屋ですが、そのクライアントもオープンで、家を愛している方ですね。

それから最近の若い建築家は内外を明快に仕切りますが、この家は建具で仕切られているからすごく曖昧。戸を開けないと、内か外かがはっきりしない。でもそういう仕切り方が、家の中に距離をつくって奥行き感を出している。

矢田朝士 最初は純粹に「隙間のあいたコンクリートの中に、透明な箱がふたつ」と考えて、簡単な動線だけを決めていました。住まい方を聞いているうちに、家族室Iと外室のあいだはメインの出入り口だから開き戸、台所と通り庭のあいだはサブだから引き戸とか変わっていったんです。

竹原 外殻が鉄筋コンクリート造で中身が木造というのは「01」も同じだね。矢田 RCは防水や仕上げも有利だし、外側の皮膜としてしっかり守れると、内側にやわらかい木を使いやすくなります。

竹原 両方を木造にすると、都市のなかでは防火の問題があるし、梁を通すとか構造的にも複雑になる。でもコストは有利だし、何重にも木のレイヤーがかかるから、また違う見え方をおもしろいと思うな。それから、この家は子どもが成長していくにはいいけれど、終の住処として車いすを使うことも考えたらちょっと疑問もある。

矢田 僕は「まずクライアントさんありき。そして僕らがある」と、竹原さんから学んできました。だから自然を取り入れたいという僕の価値観と同時に、クライアントさんのもつ価値観を大事にして発展させていきたいと思えます。

多くのものを見て経験を積む

——では22年前に時間を戻して、竹原さんと矢田さんの出会いを聞かせてください。

竹原 彼の先生である神戸大学の重村力さんから電話がかかってきて、「普通

「そんな簡単にはできない」
というのは
教えられる。

Takehara Yoshiji

の会社では、たぶんよさの出ない学生がいるんだけど、彼のよさを引き上げてくれるのは……」とか、うまいことを言われまして(笑)。それで卒業式の直前に面接をしたんです。そうしたら、すごい格好で来た。

矢田 金髪に、破れたジージャンで。何かを狙っていたわけではないんですが、「僕はこうなんだから、いいでしょ」って感じですよ。社会をわかっている。竹原さんに怒られました。「クライアントは一生かかって払うお金を、君に任せるんだ。逆の立場だったら、任せられるか」と。対外的には僕が竹原さんの顔になるわけですからね。それで次の日は髪の毛を染め直して、一応きれいな格好にしました。

竹原 でも話をすると、ものを見る視点が鋭くて魅力があった。この子はいっぱい何かを見て、経験してきているなというのがわかった。1年間、世界中を旅して、いろんな集落と一緒に住んだりしている。建築を知っていると建築ができるという話はひとつもないんですが、純粹で素直な子だから、いいかなと(笑)。

——矢田さんはどういう思いで、竹原さんのところに……。

矢田 左官とか木とか石を知っていて、日本のよさをわかっている人から学びたいと思っていました。そうでないと僕が日本人である意味がない。それでいろんな人を探していて、竹原さんに行き当たったという感じで、重村先生に相談しました。

竹原 素材をどう扱えるかというのは、僕の師匠である石井修先生と出会ったときも同じでした。建築をここまで粘り強くやる人がいるのか、この人はすごい人だなあと思ったとくに石をこんなに使える人がいるのかと。自分でも石を勉強しましたが、石の図面を見るところのスタッフのものだとわかります。

挨拶をする お金の流れを知る

——スタッフ時代の矢田さんはいかがでした。竹原 ご両親が商売をしていたのは強みですよ。ね。「おはようございます」ありがとう」という挨拶がちゃんとできる。それはあたりまえですけど一番重要なんです。スタッフには「偉

そうにするな」とつねに言っている。職人さんにちゃんと挨拶をして手伝いをしていけば、「ここを直せ」とかではなく、「これ、どうですかねえ」「どうしましょうか」という会話ができる。ものづくりをしている人間に、それからクライアントに、よい家ができそうだと思うせなきやいけない。だから大工さんはうちのスタッフに、すごくいろんなことを教えてくれるんです。現場で話を聞いて結論を出すという練習をしているわけですね。

それから矢田君は、どういう具合にお金が動いているかがわかっていました。この仕事は金額が大きいし、住宅ではクライアントがいくらお金をもっているかにまで踏み込まなければならぬ。彼にはそういうことを任せられるなと。

矢田 僕の実家は化粧品の販売と美容室をしていました。だから家に帰るとそこは店なので、「ただいま」ではなくて「いらつしゃいませ」なんです。それから、お客さんがいるのでうちは成り立っているというの、すごくよくわかっていました。美容室に来る人を見ていたし、パーマした人、カットした人、ブローした人を毎晩帳面で全部チェックして、季節や曜日による増減を知っていた。小さい頃から社会的なつながり方は見ていたので、そういうのは僕にとって大きなことだったかもしれない。

建築を突き詰めていくこと

——矢田さんがスタッフ時代に学んだのはどんなことですか。

矢田 いつまでも、ずーっとよくしていく、突き詰めていくことですね。事務所で図面を描いていても、竹原さんが戻ってくるのは夜遅くなんです。それで自分ではよくできたと思って見てもらうと、「なんか違うね」で終わってしまう。決して「あかん」とは言われない。言葉ではないけれど、もつとがんばれということなので、また考える。しんどいです。でも僕も独立してからわかったんですが、お互いにしんどかったと思うんですよ。僕がスタッフに対して、そうやって待つことはできません。「これ、ダメ。こうしなさい」と言うほうが早いですからね。

あるとき、どうやってもうまくいかないプランがあつたんです。それを竹原さんが「こうやったら、うまくいくのと違う？」とディテールを考えて見せてくれて、「うわっ、できるやん」と。つまり自分はそこまでいっていない。ああ、まだまだだなあと思いました。

竹原「そんな簡単にはできない」というのは教えられないんですよ。まだ少ししか経験がないのに、本をちょっと見たくらいでできるわけがない。そこで粘る。建築はどこで結論を出すかということだけなんです。考えるのが僕

学んだのは、いつまでも、
ずーっとよくしていく、
突き詰めていくこと。

Yada Asashi



Special Feature / Master and Apprentice Part 3

らの仕事ですからね。建築をつくるというのは、絶対にこれでいいと自分に言い聞かせなきやいけないから怖いよね。

それでこれは、手で描く図面だからそういう話ができる。CADだと、紙にプリントしてもらわないとわからない。スタッフは「考えた」と言いますが、何を考えたんだ、と。図面からは部分しか見えないんです。ただ一枚の図面のもつ力というのは、全然わからなくなってきた。

矢田 難しいですよ。僕は手描きの時代だったので、悩みながらつくった寸法は身体にしみ込んでいる。あのときにこの寸法にしたのは、こう感じたからだとかわかってるから、次はどういう寸法と決められる。CADは体感で見えていない。エアコンの温度設定で何℃が快適というのと同じです。

竹原 とくにこの家のように、レイヤーがかかって動きのあるものをCADで描くとじつにつまらない。手で描くと興行き感を知っているからまるで違う。そこはこれからのジレンマになっていくところではないかな。

師の考えていることを考える

——矢田さんが独立した経緯はいかがですか。

矢田 竹原さんのところで一定期間、修業をさせてもらったから、それをちゃんと次の後輩にバトンタッチして、教えてサポートする。ある程度、恩返しできたなら……、できてないと思うんですが(笑)、それから出ようと。またスタッフとしてやっていくうちに、自分はこうやりたいという部分もみえてきますね。

竹原 建築は奥が深いから何年で独立できるとはいえません。それからひとつの住宅をつくるのに、計画を始めてから最後に住んでいる人の様子を見に行くまで、最低3〜4年なので、ある程度は長かかります。

——ひとりかひとつの作品を担当するんですね。

竹原 そう、ひとりで全部やらせるので、うちで仕事をする完全独立で

きるようになります。大工さんの追加工事から、クライアントに設計料を払ってもらうところまで、すべてわかる。自分が何回現場に行つて、いくら交通費を使い、構造事務所にこれだけ払つてと。そして、自分の好きなことをやって利益の薄い仕事をしていることがわかると、何も言わなくてもほかのスタッフの仕事を手伝うようになるんです。

—— スタッフによるデザインはどのくらいまで許容されるんですか。

竹原 僕が石井事務所のスタッフだったときは「先生はこう考えるだろうなあ」といつも考えていた。だから、今スタッフに求めるのは、僕が考えていることを、ちゃんと考えておけよということです。でも、不思議と同じようなことを考えているんですね。まあ、全然違うことを考えるなら、うちにいなくてもいいんじゃないの。アトリエ事務所では、親分が全部描いてスタッフに渡すこともできますが、やはり両者が戦わないとおもしろくない。それがデザインですよ。描いてきたものを、「いいねえ」と言うこともあれば、「違う」と言うこともあります。

矢田 打ち合わせをしていくうちに、竹原さんの口からポロッとイメージが出てくることもある。そうすると、ここにこういう感じの光を入れたらいいのかなあと想像します。

描くおもしろさから始める

—— 竹原さんは大阪市立大学で長く教えられていましたが、大学で教えることと、事務所で教えることの違いはありますか。

竹原 学生ときには、ものつくり方の方の仕組みとか、その建築がどうして建ち上がっているのかという話をする。現物を見たり、図面を読み込むことが重要です。写真と図面をもとに模型をつくれるようにするとかね。どんな手を動かしていくと、いろんなものが膨れあがっていく。

それから学生には、手で描いたスケッチを全部、絵手紙として出してもらう。就職のプレゼンにはそれをファイリングして使っんです。見るとちよつとびっくりしますよ。

矢田 その絵手紙はスケッチと自分の感じたことが描いてあるので、どういう学生なのかよくわかります。

竹原 僕の授業は、いつも30〜40分前に行つて、黒板にびっしりと絵を描きます。学生にそれをやらせると、線がまっすぐに引けなかったり、スケール

和歌山市地域農業総合管理センター

(竣工/1997年)

竹原義二の設計による「四季の郷公園」の中核施設で、担当は矢田朝土。緑豊かな丘を背景に、緩勾配の屋根と曲面を描く木質の壁が、やわらかなのびやかな印象を醸し出す。
写真/絹巻 豊



感がわからなかったりする。でもそのうちに、「50分の1の縮尺で1m」と言われたら、何も見なくてもその長さが描けるようになる。それが授業ですよ。描くおもしろさを学生に教えるんです。

事務所はまだ違って、僕が「何々がさあ」と言うと、パツと本を探してきて、「これでしょ」とすぐに出してくる。僕が普段、何を見ているか、今何を思考しているかを知っている。そうすると共通するものなから新しいものが生まれてくる。事務所では会話が続けることが重要です。

—— 竹原さんの事務所のスタッフ、OBのつながりはいかがですか。

矢田 基本的に仲はよいと思います。みんな建築がすごく好きで、朴訥まじめな人ばかりです。事務所の頃もOBになっても、わからないことがあると言えば、すぐにサポートしてくれる。

竹原 それは石井事務所の人たちも同じですね。

受け継がれていく価値観

竹原 今、師匠がいる人が少なくなってきた。そういう人は、本を読んだりして自分の好きな建築家を見つけておけばいい。こういう建築家が好きだと言えることが大事だと思う。

僕の場合は「自分の師匠はどういう人ですか」と聞かれたらすごく明快に答えられる。石井先生の弟子、いわゆる門弟はたくさんいて、そうすると自分の立ち位置がみえてきます。自分は社会のなかでこういうポジションにいて、こういう役割があると。たとえば遠藤秀平さんが神戸大学で教えているのを見ると、考えていることがよくわかる。それは同じ師匠筋でやってきているからですね。僕も、尊敬できる、魅力がある師匠と言われるように仕事をしたい。

矢田 価値観というのは、師匠を通して継承されているんですね。自分で発見する部分もありますが、こういう大事なものが世の中にはあると教えられること。それは師匠がいるよさだと僕は思います。

竹原 今でも設計しているときに、石井先生ならこれをどう考えるだろうと思うことがある。もう亡くなっているのですが、それを考えられるのはすごく幸せだと思います。建築は一過性のものでなくて、次にどう引き継ぐかとおつねに考えるものだから、それが次のステップになつていくはずなんです。

作品 「ES house-02」

設計

矢田朝士



身体を目覚めさせる空間



外室+空庭

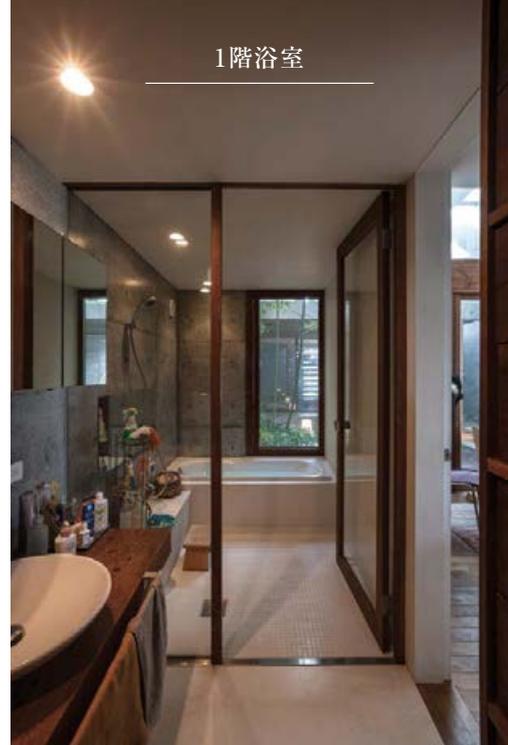
5mの高さをもつ外室と、
手すりもなくつながる空
庭。外気と光に満ちた空
間で植物が育っていく。

ここでは自然と
どう向きあうかがつねに問われる。

「ES」とは
「Environmental Shell」の意。

取材・文／豊田正弘 写真／川辺明伸

写真右上/手前の洗面所から浴室、内庭へと空間が連続。「たまり」をつくらず、外部へつなげる。



1階浴室



Special Feature / Master and Apprentice Part 3

1階トイレ



個室1への通路

写真右中/外室の脇に設けられ、高さは3.5m。天井全面から採光する。右下/外部の空間だが、右手のフィクスガラスや低く張り出した庇が快適な環境を保つ。

すべての部屋は
外部と
つながっている。



通り庭



写真左／中央玄関を入ると路地状の空間が連続し、ここでは左の台所と右の奥庭をそれぞれ引き戸でつないでいる。右奥には事務所が見える。

写真上／建具を開け放つと、家族室1と外室は一体の外部となる。1階の部屋は床レベルを下げ、重心が低く落ち着いた空間としている。

外室+家族室1



空庭

家族室

生活を守る箱

「E S h o u s e 02」は周囲から突出することなく、しかし堅固なシェルターとして独特のたたずまいを見せていた。平屋の事務所部分と対比的に、住居部分は2層のコンクリートボックスで、がっちりした木格子がわずかに内部の気配を伝える。そうした構えをとる理由は周辺環境にあり、高校のグラウンド、高層の市営住宅、商店、戸建て住宅などが混在し、東側には3階建ての幼稚園が隣接しているのだ。たとえば中庭を囲むような平面をつくってみても、まわりから見下ろす視線を遮ることはできない。

内部に引き込まれた外部

アプローチ右手の引き戸を開けると、スケールと光を抑えた洞窟のような玄関。そこを左手に進むと、屋根スラブまで5m以上吹き抜けた、明るい空間が迎えてくれる。この大きなコンクリートのポリュームに、2層の木造によるガラスの箱がふたつ、入れ子になっている。そして建主さんからは「靴のまま

でどうぞ」と案内される。ここでは室内以外は下足履き。ご家族は突っ掛け（サンダル）で部屋同士、そして上下階を移動している。

太鼓張りの巨大な紙障子の建具を引くと、中央の外室に出る。随所に施された緑が目を楽しませる。ただし、ここはまだ「外」だ。東西の壁際と真上のスリット状トップライトは一部ガラス入りだが、ファサードと裏手の木格子、地窓のスリット、2階壁の丸穴などすべて素通しで、外気がめぐっている。園児たちの歌声もかすかに聞こえてきた。



2階

コンクリートの外殻で入れ子状になった室内からは、ガラスのフィルターを通して外庭の向こうの部屋まで視線が抜ける。

透明に連なるインテリア

そして南北両端の階段でそれぞれ2階に上がると、きわめて印象的な風景が展開する。中央の外室、向こう側の室内、その先の木格子の光までが、ガラスのレイヤー越しに、反射を伴いつつ見通せる。家の中のさまざまな領域を相互に明確に把握できる感覚はなかなか得がたいものではないか。またほとんどの室内は、ガラス一枚

の壁面で構成される。しかし、コンクリートの入れ子構成により、物理的な不安感がない。そこには「守られた開放感」とでもいふべき不思議なインテリアが現出していった。

自然をつねに感じて暮らす

取材日は年間を通して一番寒い時期だった。外室にいと、正直なところ、震えるほど寒い。また台風ときには雨もかなり入ってくるそうだ。自然を取り込むには、あるきびしさを引き受ける必要があると知らされる。

ただ同時に気づくのは、ここは寒風が吹きすさぶわけではなく、環境が微妙にコントロールされているということだ。たとえば、外室と個室1への通路とのあいだにある大きなフィックスガラス。実際には通路は外部だが、空気の流れを止めている。1900mmと低く設えた庇からも同様なやさしさが感じられる。

建主さんは、「慣れてしまうと、住みやすいのか住みにくいのか、わからん」と笑う。この家に込められた光や風は、図面からは想像もおよばない多様な質を秘めている。わずかな滞在時間のうちに、自分の五感が少し鋭敏になったようにすら思えた。



手前に事務所が見える南西側全景。

ES house-02

建築概要

所在地	大阪府大阪市
主要用途	専用住宅+事務所
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	矢田朝士/ATELIER-ASH
構造設計	工業舎
施工	木村工務店
敷地面積	216.1㎡
建築面積	127.77㎡
延床面積	185.97㎡
階数	地上2階
構造	鉄筋コンクリート造+木造
設計期間	2007年9月~2008年9月
施工期間	2009年2月~2009年9月

おもな外部仕上げ

屋根	RC直押え(躯体防水) 撥水材
外壁	RC化粧打放し 着色撥水材塗り
開口部	木製建具

おもな内部仕上げ

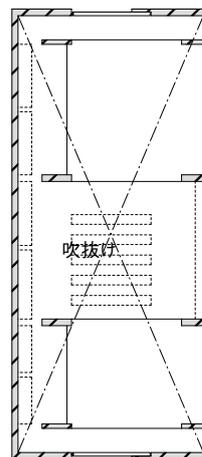
外室	
床	ヒノキ スノコ オイル塗り
壁	RC化粧打放し
天井	RC化粧打放し
家族室1+2	
床	ナラフローリング オイル塗り
壁	RC化粧打放し (一部PB t=12.5mm AEP)
天井	PB t=9.5mm AEP
個室1+2	
床	ナラフローリング オイル塗り
壁	RC化粧打放し (一部PB t=12.5mm AEP)
天井	PB t=9.5mm AEP
洗面所	
床	長尺塩ビシート ワックス塗り
壁	RC化粧打放し
天井	FB t=6mm VP
浴室	
床	モザイクタイル張り
壁	RC化粧打放し、一部FB t=8mm VP
天井	FB t=6mm VP

平面図

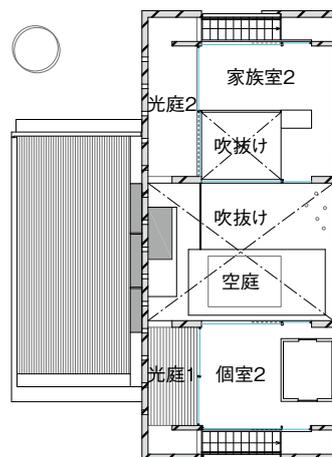
1/250



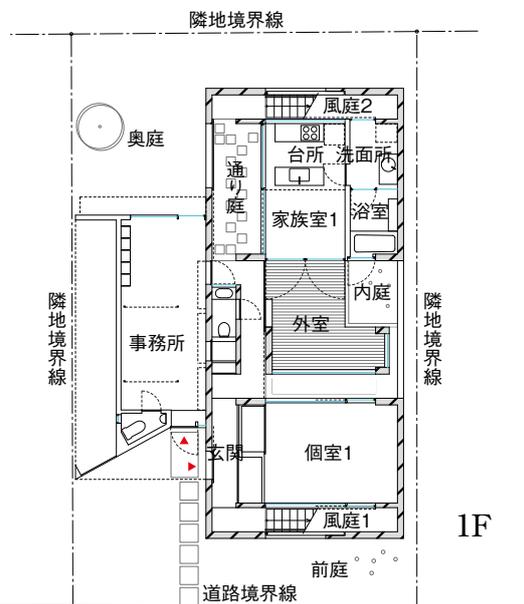
0 1 2m



Roof



2F

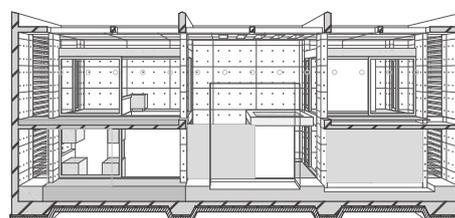


1F

断面パース図

1/250

0 1 2m



難波和彦

師

特集／師と弟子／4

対談

自分
らしさを
見つける
ために

弟子

河内一泰

河内一泰さんは、
施主の与条件より先に、
独自の提案をする
建築家のもとに行こうと
決心していた。
そのひとりが難波和彦さん。
まとも／伏見唯 写真／川辺明伸

Special Feature
Master
and
Apprentice

Part
4



Namba Kazuhiko
Kochi Kazuyasu

Namba Kazuhiko

Kochi Kazuyasu

河内一泰さんが設計した「アミダハウス」。屋上を含めると、8つの床レベルがある。さらに、棚の天板も加わり、たくさんのレベルがアミダくじのようにずれて積層している。

界工作舎に入所した頃

——まずは、河内さんが入所された頃のお話を聞かせてください。

河内一泰 2000年に、東京藝術大学大学院を修了後、僕はヨーロッパに2カ月ほど行っていたのですが、その帰国後に就職先を探していました。もともと個人の建築家として独立したいと思っていましたから、どの建築家のところで実務経験を積もうかと、建築雑誌をパラパラとめくっていたんです。そのときに難波さんの「箱の家23」(1998)が目にとまりました。形態としては、正直、あまり印象に残らなかった(笑)のですが、自分の方向性がはつきりしていない若いときには、作風の濃い建築家のところより、むしろ汎用性のあるアノニマスなものをつくっている建築家のものと働いたほうがよいと思いました。もうひとり気になっていたのは坂茂さんです。そのとき、僕の知る限りでは、お施主さんから条件を与えられるより先に、建築家側から独自の提案をする人は、坂さんと難波さんしかいませんでした。おふたりのどちらかのもとに行こうと心に決め、まずは難波さんに会いに行ったわけです。初めて難波さんに会ったときに「印象に残らなかった」ということも含めて、今述べた志望理由を正直に申しあげたら、「君はデザインのことをわかっているね」と言われました。

難波和彦 確かに、そういう経緯でしたね。修士計画などのポートフォリオも見ましたが、「箱の家」とはなんの関係もなかった。ただ、みなそうですよ。学生時代の設計課題で、設計者としての方向性が固まる、なんていうことはありませんからね。河内君の入所は、僕のほうから見ると、ちょっと違った事情がありました。そのとき、ちょうどギャラリー・間での展覧会「『箱』の構築」(01)の準備をしていたので、「体格がよく、見るからに体力がありそうだ。展示要員だ」と思ったのです(笑)。だから、河内君の最初の仕事は展覧会担当。

河内 僕としては、最初から住宅設計の実務を担当したかったのですが、入所後半年間は、ずっと展示のことばかりをやっていました。「箱の家」だけでなく、それ以前の作品の写真を時系列で整理したり、図面がない建物の図面を描いたり、という作業です。最初の半年間は、難波和彦という人物を予習する期間でした。

難波 河内君はフットボール部出身で、予想どおり体力があったので、原寸モデルの設営なども難なくこなしてくれました(笑)。

——展覧会の後は、住宅の設計を担当されるのですか。

河内 展覧会の準備の後、すぐに「箱の家48」(01)を担当しました。その後、58番(02)、64番(03)、71番(03)と計4件を担当し、最後の4軒目の途

標準化された「箱の家」は、
所員が自分で学んで
設計することができる。

Namba Kazuhiko



中で退所しました。

難波 河内君の在籍中は、「箱の家」が一番進化した時期でした。ローコストのための標準化、一室空間住居というライフスタイル、高性能とコストパフォーマンスといった「箱の家」の一連のコンセプトを統合して、「サステイナブルな箱の家」に進化させようとする転換期だったのです。たとえば、河内君担当の48番はLVL(Laminated Veneer Lumber)を最初に使った「箱の家」でした。LVLは、かつてエンジニアリング・ウッドを取材したときに、一番先進的な素材だと思っていました。LVLは、ニュージーランドやチリなどの資源国で、コンテナに積み込むサイズに事前に加工して、真空パックの状態に日本に輸入される材料です。丸太のまま運搬するような乱暴さがなく、資源国での労働を生み出す付加価値があるので、ただの搾取ではない。そういう観点でLVLを使うことにしました。

所内での、師と弟子のやりとり

——そうした新しいコンセプトや材料が、所員から提案されることもありますか。

なんば・かずひこ/1947年大阪生まれ。69年東京大学工学部建築学科卒業。74年同大学大学院博士課程修了。77年界工作舎設立。96年難波和彦+界工作舎代表取締役。96

2003年大阪市立大学建築学科教授。03、10年東京大学大学院工学系研究科教授。現在、東京大学名誉教授、放送大学客員教授、難波和彦+界工作舎代表「箱の家1」(95/95年第12回吉岡賞、東京建築士会住宅建築賞、東京建築賞)、96年国立国会図書館関西館コンペ優秀賞「箱の家17」(97/98年東京建築士会住宅建築賞、00年日本建築士会連合会賞業績優秀賞)、「箱の家48」(01/04年JIA環境建築賞)など。

難波 ほとんどありませんよ。みんな勉強しないんだもの。

河内 自分なりには勉強しているのですが、ちょっと勉強したくらいでは、難波さんに太刀打ちできませんよ(笑)。それと「箱の家」は、まずは難波さんが200分の1の平面スケッチを描いて、それを所員がCADで起こして、チェックバックを戻す、という流れで設計しているのですが、スケッチの精度がかなり高く、その時点で、構造などの大枠はほとんど決まっています。もちろん所員も微調整はしますが、設計過程は、そんなにインタラクティブではないですよ。

難波 ただ、河内君が辞めた直後くらいからは、大学の教員になったこともあって忙しくなったから、所内コンペもするようになっていきました。僕の家が採用になったことは何度もある。そ

これは、所員が「箱の家」を理解してきてくれたからだと思います。

——「箱の家」をはじめ、難波さんは設計方法をどのように所員に伝えていますか。

難波 「箱の家」については、すべてオープンソースとして公開していますし、これまでの施工図の合本がすべて事務所にありますから、所員はそこから自分で学んでいます。「箱の家」は標準化されていて、敷地や家族が違っても基本的な仕様は同じですから、極端な話、前の図面を転用しても設計をすることができるようになっています。そういった意味では、「箱の家」は結果的に、数年で所員が入れ替わるアトリエ系の設計事務所にとって、効率的な設計方法になっているのかもしれない。

河内 標準化されている「箱の家」を見て、寸法や性能などの建築の基本的なことを勉強できると思ったのも入所の決め手でした。それは、とても身になっていて、今でも役に立っています。

難波 この「アミダハウス」も、そうした寸法でできていますね。「箱の家」の寸法は身体にしみついてますから、見ただけでわかりますよ。

河内 一つひとつの部屋は標準的な寸法でつくり、そのつながりで大きなワンルーム空間を生み出していく、という手法は「箱の家」から学んだことです。ワンルームにすると、見た感じたりする情報量が多くなり、空間の密度が高くなり、楽しさや豊かさにつながると思っています。

難波 そのためには、オーダー、つまり秩序をあまりもち込まない、ということも重要なんでしょうね。分散して均一で、しかも中心がない、という状態にしないと、空間の密度は上がらない。ここは何の部屋、とか用途もあまり明確に出さないほうが効果があると思います。

河内 そういうふう設計すると、どの場所も入れ替え可能な状態になり、汎用性を帯びますよね。以前、西沢立衛さんが「どこでもリビングだ」と言っていました、その言葉に共感しています。

難波 西沢さんが設計した住宅もそうだけど、この家もパーティをしたら楽しい場所だと思うよ(笑)。いろいろな場面でいろいろな光景が見られる。

独立してからの方向性

——独立後、河内さんは、師匠である難波さんや「箱の家」と、どういった距離感で仕事をされていますか。

河内 僕は、もともと30歳で辞めると決めていて、たまたま在籍中の3年間でRC造、鉄骨造、木造をひととおり経験できましたので、予定どおり30歳で退所しました。独立後、意図的に距離をとろうと思ったことはあり

できるだけアノニマスなものをつくらせている建築家のもとで働きたいと思いました。

Kochi Kazuyasu



Special Feature / Master and Apprentice Part 4

こうち・かずやす／1973年千葉県生まれ。98年東京藝術大学美術学部建築科卒業。

2000年同大学大学院修士課程修了。00～03年難波和彦＋界工作室。03年河内建築設計事務所設立。現在、芝浦工業大学、日本大学、東海大学、東京藝術大学非常勤講師。「HOUSE.kn」(06/09年AR Awards 2009SHORTLISTED)、「アミダハウス」11/11年で中部建築賞入選、13年日本建築学会作品選集新人賞。その他の作品に「書家のアトリエ」(04)、「KCH」(09)、「庭の家」(09)、「住宅地の家」(10)など。

——「箱の家」といえば、環境性能の高さも特徴ですが、独立後もその点は継承されていますか。

河内 「箱の家」で学んだ断熱のスペックや日射制御については、基本的には理解していますが、なかなか設計には生かしていません。先日、「アミダハウス」の図面を見た難波さんに、断熱性能が確保できていないことや、東西が開放的なために夏の朝夕の日射に対して無防備で、霧除け庇のない東西の窓は、梅雨時には通風機能を十分に発揮できない、という旨のご指摘を受けました。

難波 けしからんでしょ(笑)。

河内 西側に大きくそびえる富士山に向かう視線を確保しなかったのです。「箱の家」で標準装備している環境装置もなかなか引き継いでいないし、課題だとは思っています。

難波 「箱の家」は標準化を徹底していますから、引き継ぐことと思ったら「箱の家」そのものになってしまいます。所員が独立後に、「箱の家」のコンセプトを引き継ぎながら、それを展開させるのは難しいのかもしれない。その苦悶がうかがえます(笑)。

ませんが、独立した先輩で、ほぼ「箱の家」と同じものをつくっている方がいましたが、自分は少し違う方向性で行こうとは考えませんでした。先輩の遠藤政樹さんも、「箱の家」とは異なる方向性に進んでいるし、僕もどちらかといえば、そちら側の道を進もうと思っていました。

難波 在籍中は「箱の家」ばかりつくるから、所員は飽きてしまいうんじゃないでしょうか(笑)。河内君が最初に設計した住宅「書家のアトリエ」(04)は、箱が斜めに立ち上がった形態だったね。

河内 あの家を、オープンハウスでは「これは『箱の家』だ」と言う人もいました。難波さんは同意しないかもしれませんが、工場でつくった断熱パネルを用いるとか、黒い外壁で太陽熱を集熱して屋上の雪を溶かすなど、考え方としては「箱の家」を引き継ぐことも考えていたのですが、形は少し違うものを目指していたかもしれませんが。

——標準化や合理性への志向など、難波さんの思想には、師にあたる池辺陽さんから続く系譜があるかと思いますが、その点についてはどのように考えられていますか。

河内 まだ自分をその系譜の上のせて考えることはできていません。将来的に、系譜の一員としてとらえていただけたら、とは思いますが。難波さんが95年に「箱の家」のシリーズを始めるのは、実務として20年ほどの経験を積まれてからでしたから、僕ももう少し経験を積んだら、何か系譜にのれるようなシリーズを始めるかもしれません。僕は「箱の家」は事業性もすぐれていると思っています。難波さんのところには、2週間に一度くらい、飛び込みでお施主さんが来るんですよ。内側の設計の合理性だけでなく、「箱の家」は外に向けたPRとしても効果的です。僕もいつか定番の型をつくって、連続させていくということも考えたいと思っています。

難波 身体的な寸法や、生産上の合理性など、「箱の家」の基本コンセプトの多くは、僕も池辺さんから教わったことの延長で考えていますから、「箱の家」の担当者は、そのつながりのなかにはいるわけです。ただ、「箱の家」のようなシリーズは、自分の意志で継続できるものでもないからね。まずは自分でコンセプトを発信してから、それを建てたいというお施主さんが現れないと。僕の場合、発信しすぎて、仕事を「箱の家」ばかりに(笑)。今では、住宅だけでなく、工場でも幼稚園でも図書館でも、「箱の家」の延長で考えてしまいます。その傾向を決定づけたのは、ノーマン・フォスターの「セインズベリー視覚美術センター」(78)。大きな箱の中に、バーコードのように、食堂、教室、美術館、カフェ、学生ホールが等価に並んでいます。設備などは箱を構成する2・4mほどの幅のスキンにすべて入っている。これを見て、「これでいいんだよな、すべての建築は『箱』でよい」という考えに結びつきました。

「アミダハウス」をめぐる 師弟談話

——「アミダハウス」を実際にご覧になった感想はいかがですか。河内さんは、ル・コルビュジェがドミノシステムによって示した「自由な平面」と「自由な立面」を受けて、「自由な断面」という言葉で、この住宅を説明していますね。

難波 ドミノシステムと対比させて説明するというのは、意図はわかるが、正直恐れ多いと思いましたね(笑)。ドミノには、工業化部品をインフィルとしてはめ込むための、スケルトン・システムの構想という、工業生産化

住宅のプロトタイプという側面もあったのだから、空間性だけで対比しては手落ちだろう。ドミノをもち出さなくても、シンプルな器の中に、こういった複雑な空間があるというのは、それだけですごく魅力的だから。

河内 確かにドミノをベースにするのはいきすぎたかもしれませんが、普通の木造2階建ての家では、床の分断が非常に強い、と日頃から感じていたので、そのことについて考えたいと思いました。「箱の家」のように吹抜けがあれば、床による分断は薄まっていますが、一方で床面積というものはお施主さんにとって利益なわけだから、吹抜けばかりをつくって床面積をむげに減らすわけにはいきません。床による空間の分断をやわらげながら、床面積を減らさないようにするために、少しずつスライドさせながら積み上げていく、という手法を考えました。

床によって上下が
分断されない住宅を
つくりたいと思いました。

Kochi Kazuyasu

開をしていきたいと思っています。

難波 そういうことであれば、この家のよさを援護する意味で、もうひとつコメントするならば、この「アミダハウス」は「住宅」なのだが、空間構成や視線の制御といった意味で、「建築」的な方法を「住宅」に当てはめる試み、ととらえてはどうだろうか。それは「住宅」と「建築」を分けて考える一部の建築観に対する挑戦であり、今の時代状況だからこそ生まれているのかもしれない。

——これまでの河内さんの作品と比べて「アミダハウス」はどのような印象ですか。

難波 今までに見た住宅のなかでは、一番よくできていると思います。密度が上がってきていますね。

河内 僕自身にとっても、この住宅は重要な作品です。建築は表層だけではダメで、中身に工夫がなければ、何かをやったとは言いがらゐるのですが、今回は自分の納得のいく内部空間がつくれたと思っています。

難波 最近では、コンペや賞の審査のときに、若い人が設計した建物を見る機会がけっこうあるのですが、総じて「埃っぽい」という印象をもっていました。同じことを竹原義二さんも言っていましたね。もちろん、実際に埃があるということではなくて、うまく言えませんが、細かく考えていない部分とか、明らかに力が入っていない部分が垣間見えると、埃っぽく感じてしまう。白く塗り込められた建物はその典型です。白く塗ることであるのと覆い隠そうという発想は埃っぽい。

じつは、これまで河内君が設計した建物も、埃っぽいと思っていま

したが、この住宅ではそれを感ぜなかった。

河内 ありがとうござい
います。今の難波さんの話は、僕にとつて新鮮です。今のような空間の質の話は、事務所ではほとんどしませんでしたよ。フレキシ

ブルボードの性能やコストの話はしていましたが、それによってどういう質の空間ができるか、という話は、ほとんど聞いたことがありません。

難波 ジェイムス・スターリングという建築家は、意匠的に凝った形や色を使いますが、そんな彼でも、建築については機能や性能についてしか話さなかった。それはイギリスの社会風土によることもあるが、彼はいつ



箱の家58
(竣工/2002年)

鉄骨造と集成材造を組み合わせた住宅。1階は駐車場で、2階、3階には大きな吹抜けがある。「箱の家」がサステイナブルデザインを目指して展開された時期のもの。写真/坂口裕康 AtoZ

さい、形についてはしゃべらない。建築業界には、ロマン主義に対して一定の距離を置く慣習があつて、僕の師匠の池辺陽さんも、所員がそういう話をしたら怒り狂っていましたよ。「通りすぎる影のような……」とか、わけのわからないことを言う設計者がいたら殴つてやるかと思えますよ(笑)。河内 そういうポエティックな感情は、本当はみんな好きなんだと思えます。でも、それをストレートに表現しては、難波さんの言うように間の抜けた感じになつてしまうから、表現が難しい。

難波 言わなければいいんですよ。建築の質は、その建築を使っている人、住宅に住んでいる人が、日常のなかで感じればよいこと。設計者が自ら言う必要はない。もちろん、叙情的なことが設計の主題でもよいけれども、そういうことをいちいち言うな、と思う。誰もがフォームギバーだと思つているコルビュジエは、晩年のインタビュによる、ロマン主義に対する罪悪感があつたらしい。僕はそれを聞いたとき、コルビュジエですらそうなのだから、僕たちがロマン主義をかざすのはおこがましい、と強く感じました。建築の美学は、つくり手ではなく、体験する人が語るべきだと思つています。

——この家を体験されたうえで、いかがでしょう。

難波 「箱の家」よりずっとフォトジェニック

クですよ。河内「フォトジェニック」という言葉は、難波さんの場合、否定的な意味で使っていますよ(笑)。

難波 あえてポエティックにまとめると、この家の印象は、「竹下通りにはいないような、ちよつとおしゃれをしたさわやかな女の子」でしょうか。



スライドする床

寝室

1階の寝室から各階を見通す。ポスト柱を細くし、逆に手すりを太くすることで、構造材と二次部材の視覚的な印象を近づけている。

床がずれ、各階を見通せる住宅。
収納や動線、設備などを調整し、見通しのよい
広間が実現された。

取材・文／伏見 唯 写真／川辺明伸



キッチン キッチンから、ダイニング、リビングを見る。棚や屋上にははしごがかけられている。

空間を隔てることのない
断面の構成により、
視線がどこまでも伸びていく。

「アミダ」による 見通し

「アミダハウス」は、富士山が眼前に聳える静岡県御殿場市の住宅地にある専用住宅。四辺がほぼ東西南北を向き、北側が前面道路の四角い敷地に立っている。

平面上は、東西方向に走る芯々910mmの幅の帯が両端にあり、中央部分に大きなスペースをとった川の字のような構成である。この構成は、中央部分において、西側に見える富士山に向かって、大きく開口部を設けるためのもので、構造上の耐力壁や、室外機置き場、収納、動線の多くが帯部分に集約されている。その結果、中央の部分は見通しがよく、内部の柱も鉛直荷重しか受けない、二次部材のような細さのポスト柱にできている。また、東西

方向に走る川の字に対し、南北方向の中央には心々1820mmの幅の中廊下を走らせてあり、その中廊下によって、ガレージや寝室、ダイニングキッチンなどの異質な用途をゆるやかに分断。地下ではそこを浴室や大きなクロゼットにするなどの工夫もみられる。

さらに中央部分の見通しをよくしているのが、スキップフロアのようにずらしながら積層させる床の配置で、階層間で視線が遮断されないつくりである。通常の縦積みの床をずらしている。設計者の河内一泰さんは、この状況を、ル・コルビュジエのドミノシステムを引きながら、その理念である「自由な平面」と「自由な立面」を受けて、新たに「自由な断面」に挑戦したものだとして説明している。壁による分断だけでなく、床による上下の分断も和らげたいという想いが込められている。

トイレ

南北の耐久壁の部分に納められている。



ガレージ

ガレージから居室を見上げる。境にはガラスがはめ込まれている。



浴室

1階の浴室。半階上がったところに寝室がある。



窓のサッシはポスト柱の後ろに隠されている。

2階リビング。右手の西側方向に晴れていたら富士山が見える。

テラス

リビング



隠すものと、 見せるもの

ドミノシステムとの関係性は難しい問題で、歴史的な文脈のなかでは簡単に鶴呑みにできるものではないが、「アミダ」の構成や開放性への志向の副産物として生まれたであろう、室外機や収納品などの「隠す」ものと、リビングやガレージのバイクなどの「見せる」ものの仕分けは、とても秀逸にまとまっているのではないだろうか。いわゆる建築家の住宅で収納論が議論されることは少ないが、中央部分のスッキリとした見通しは、明らかに諸機能があふれないように整理した成果であろうから、「隠す」工夫に注目したい。

一方で、「見せる」部分では、細部にも工夫が施してある。前述のとおり、ポスト柱を細くしていると同時に、手すりは逆をやや太めの25mm角とすることで印象を近づけ、サッシ枠は柱の裏に納めている。また、中央部分の収納の天板を床板ほどに厚くし、床と天板の両方の木口を見せているので、どちらも同じように積層している印象を受ける。視界に入る要素を整理することで、見通しをよくするとともに、設計意図である「アミダ」の構成も、より際立つつくりになっているだろう。

取材時に、取材陣の荷物を収納してくださる奥さまの慣れた手つきが印象的だった。



北側全景。

アミダハウス

建築概要

所在地	静岡県御殿場市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦
設計	河内一泰／河内建築設計事務所
構造設計	MID研究所
施工	光栄工務店
敷地面積	187.35㎡
建築面積	62.94㎡
延床面積	115.51㎡
階数	地上2階+屋上
構造	木造在来工法
設計期間	2009年12月～2010年8月
施工期間	2010年10月～2011年3月

おもな外部仕上げ

屋根	FRP防水 ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 壁はぜ葺き
外壁	ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 壁はぜ葺き
開口部	アルミサッシ
外構	砂利コンクリートはけ引き

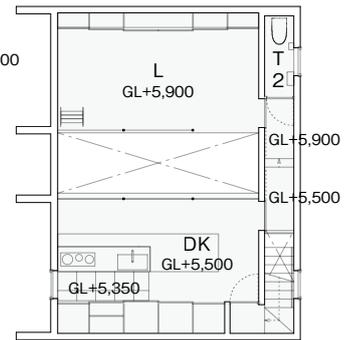
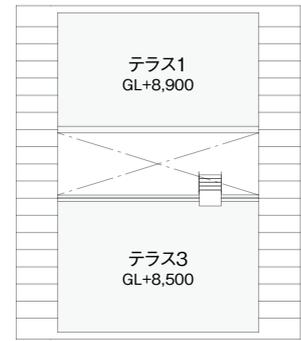
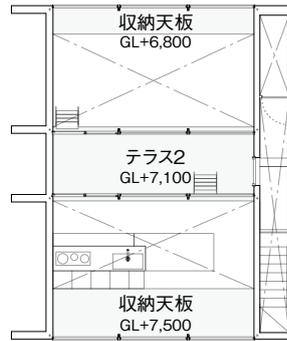
おもな内部仕上げ

リビング・寝室・客間・トイレ2	
床	ラワン合板 t=12mm ステインUC2回塗り
壁	PB t=12.5mm 調湿塗装
天井	PB t=9.5mm 調湿塗装
ダイニングキッチン	
床	ラワン合板 t=12mm ステインUC2回塗り
壁	PB t=12.5mm 調湿塗装
天井	PB t=9.5mm 調湿塗装
浴室	
床	600mm角磁気質タイル
壁	FRP防水
天井	耐水PB t=9.5mm UP
脱衣室・トイレ1	
床	600mm角磁器質タイル
壁	PB t=12.5mm 調湿塗装
天井	PB t=9.5mm 調湿塗装
ガレージ	
床	モルタル金ごて仕上げ SC
壁	PB t=12.5mm UP
天井	PB t=9.5mm UP

平面図

1/200

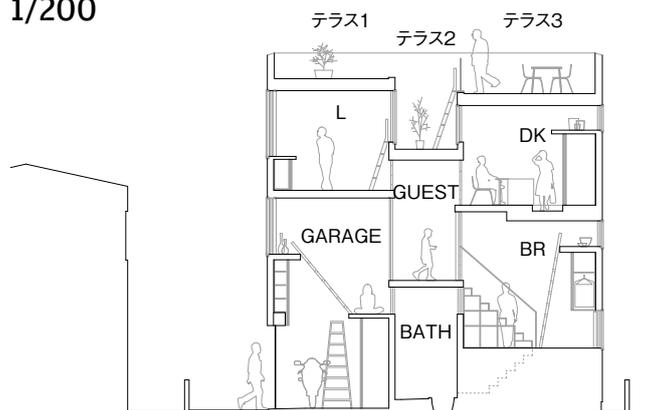
0 1 2m



断面図

1/200

0 1 2m



美術館に行くためのホテル

スペインのビルバオは、フランク・O・ゲリー（*1）設計の「グッゲンハイム美術館」（1997）ですっかり有名になってしまった。街の観光資源として大変なものである。その周辺はすっかり整備されて、気持ちのよいオープンスペースが広がる。

このホテルは美術館のすぐ前にあつて、これ以上の近さはないから客が絶えない。私たちもそうした。

美術館の前庭に「PUPPY」（子犬）という名の、花が咲く12・4mもの巨大な犬の彫刻（*2）が鎮座しているが、わが家で飼っているウエスト・ハイランド・ホワイト・テリアという犬種と同じなので、とても親しみがあつて巨大ながらも顔がほころぶ。

グッゲンハイム美術館について述べるのは本稿の趣旨ではないが、同じ設計者のロサンゼルス（「デイズニー・ホール」（2003））やスペイン・エルシエゴのホテル「マルケス・デ・リスカル」（06）などと比べてもずっとよい出来だと思ふ。展示物も世界最大級の展示室にあるリチャード・セラ（*3）の巨大な彫刻など圧巻で、これを見るだけでも来た甲斐があつたため息が出たくらいなのだ。

美術館を川沿いに少し進むと、カラトラ

バ（*4）設計の歩行者専用橋がある。できてからずいぶんたつのだが、このような構造主義に建築の健全さがみえる。床面の仕上げは、竣工当時ガラスブロックだったようだが、現在はカーペットみたいなものが敷かれてしまつてい

る。橋というとビスケー湾に面したビルバオ郊外には不思議なものがある。イバイサル川の河口付近に、あのエッフェル（*5）の弟子筋のバスカ人、アルベルト・デ・パラシオ（*6）が1893年、珍しい運搬橋「ビスカヤ橋」（19世紀末）を設計していまだに使われている。2006年世界遺産に登録された。

幅164mの川幅いっぱい、高さ50mの鉄骨が架けられ、そこから10本くらいのワイヤーでゴンドラが吊り下げられて、



世界最古の運搬橋、ビスカヤ橋。

約50人と最大6台の車をのせてゆっくり動いて対岸まで行き来している。これは建築なのか、乗り物なのか。鉄鋼と造船の街で、大きな船の往来と橋の重要性を両立させたとはいえない不思議な工造物である。

私たちは上空を徒歩で渡り、ゴンドラで帰ってきたが、板敷きの床はどこどころの隙間があり、はるか50m下に水面が見えて足がすくんだ。

さて、ホテル。145室のなかでスタンダード・ルームではなく、あえて彫刻がそり立つ中庭に面した部屋を選んで泊めたのだが、柱もあるけれど広くてなかなかおもしろい。ゲリーの造形を四六時中見なくていいのでやや落ち着くということもある。でもバスルームのドアがスイング・タイプというのが変わっている。なぜだろう。またそのドア枠がステンレスの厚板であつたりする。バスルームがガラスでできた部屋もある。

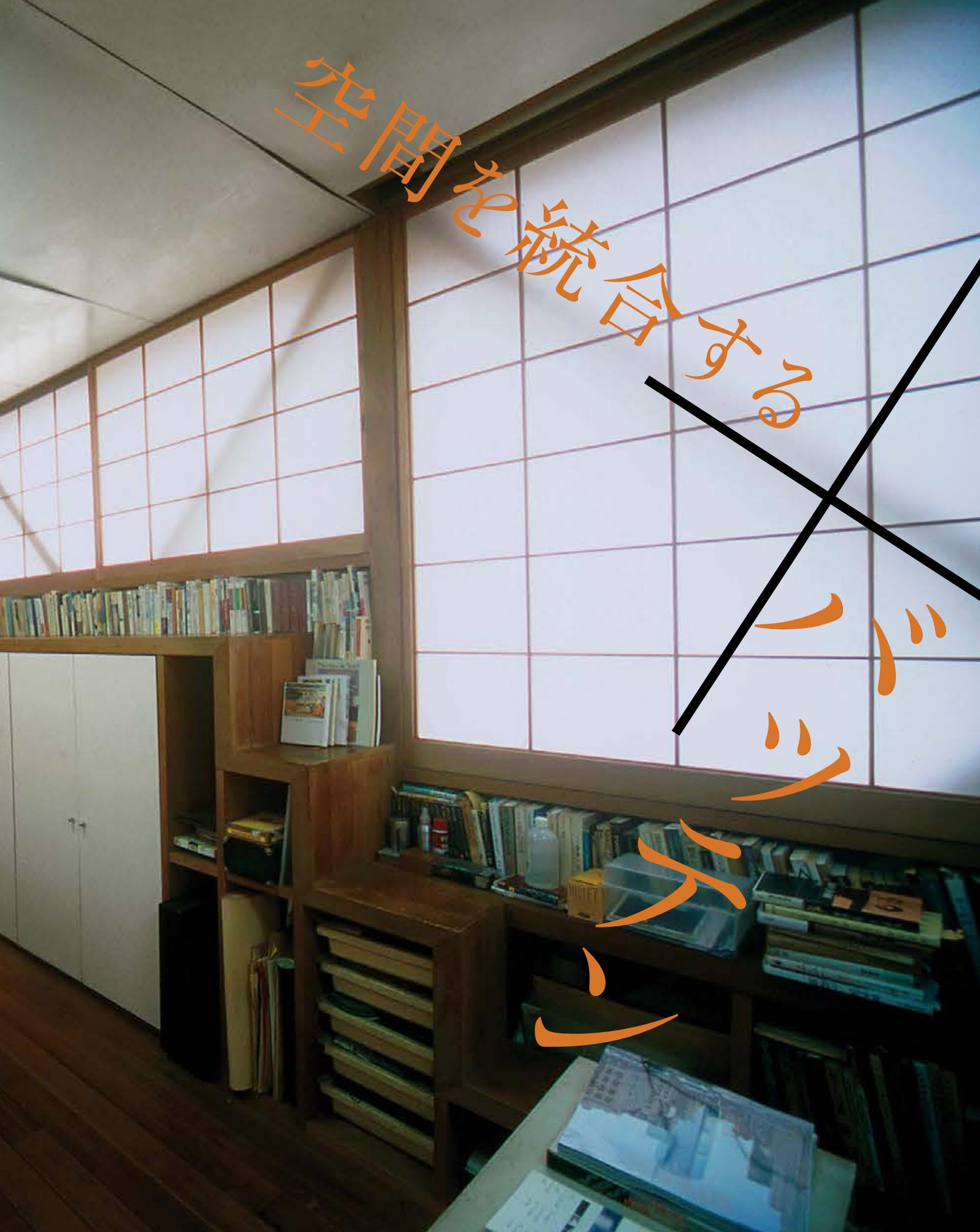
屋上のペントハウスのようなダイニングルームは開放的。朝、美術館を目の前にして1日のプランを立てる。ビルバオでは不思議なものに出会うので今日も何かあるかもしれない。

- *1 / Frank Owen Gehry (1929) ... カナダ・トロント出身のアメリカの建築家。タンパネルなどで複雑な造形の建築を世界中に送り出している。プリツカー賞など受賞多数。コロンビア大学大学院教授。
- *2 / PUPPY ... アメリカの彫刻家 Jeff Koons (1955) の作品。巨大なキッチュ・イメージの彫刻で知られる。
- *3 / Richard Serra (1939) ... サンフランシスコ生まれのアメリカの彫刻家。ニューヨークをはじめ、公共の場で巨大な鉄の板を組み合わせた彫刻を世界の諸都市につくる。94年高松宮殿下記念世界文化賞受賞。
- *4 / Santiago Calatrava Valls (1951) ... バレンシア生まれのスペインの建築家。厳格な構造技術による建築が多い。「ミルウォォーキー美術館新館」(01)、「イシオス・ワイナリー」(01)、「アテネ・オリンピック・スタジアム」(04)など。
- *5 / Gustave Eiffel (1832 ~ 1923) ... フランスの技師。1889年のパリ万国博のための構造物モニュメントコンペが催され、エッフェルの案が採用された。
- *6 / Martin Alberto del Palacio Elissague ... ビルバオ出身。エッフェルと親交があつたとこわれる。

うら・かずや / 建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99 ~ 2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。北海道日建設計デザインアドバイザー。著書に「旅はゲートルーム」（東京書籍・光文社）、「測って描く旅」（彰国社）、「旅はゲートルームII」（光文社）がある。



巨大なPUPPY。



武蔵新城の住宅 設計／富永 讓

1/2階の全景。先
ほうに見える3階には、
右手の本箱兼階段から
上がる。



現代 住宅 併走

第二十五回

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Akiyama Ryoji

連載

写真／秋山亮二

白

分の失敗の経験を踏まえ、若い人の設計に注文を出しつづけた故・林昌二が、

その昔、ブレースを露出するな」との一文を書いた。狭い家の中に、狭いが故にせよ斜めの材が走るのは、垂直・水平の美を基本とする戦後モダンズムのなかで育った林さんの目には耐えられなかったにちがいない。一文を読んで、私もそう思った。青竹のバツテンは閉門蟄居のしるし。

1970年代は新しい住まいのあり方が建築家によって提案された黄金の時代で、その掉尾を飾る「武蔵新城の家」(80)を訪れるにあたり、一番心配だったのはこの一件だった。この家は富永譲の自邸。当の設計者に、バツテンはよくない」とは言えないだろう。

富永さんは第2作の「上田の住宅」(77)から自邸を経て「裾野の住宅」(82)まで、バツテンを自分の木造住宅のしるしとしているく

らいだから、林昌二の苦言は富永さん向けだったかも知れない。

バツテン好きはル・コルビュジエと関係あるのでは、と会う前に予想していた。バツテン

大通りによってパリを大改造する計画で衝撃のデビューを果たした若き日のコルビュジエに、富永さんが早くから取り

組んでいるからだ。本人にコルビュジエとの関係の

起点について聞くと、「菊竹さんから独立したが、厨房と食堂の改修設計代として30万円

もらって大喜びしているような仕事の時代で、事務所が近い2年先輩の伊東(豊雄)も同様だから、安い昼飯を食ってダラダラ話した後、事務所に帰ってもするこ



2/均質な町割り住宅光景のなかに家型が突出する。その後の「家型」コンシヤステザインの先駆をなした。

2

ツウツとして精神におかしくなるから、コルビュジエの『ガルシエ邸』(27)あたりから模

型をつくり、勉強がてら気を紛らわせていた」その頃、日本でも世界でもコルビュジエ熱は没後の鍋底状態にあり、若い世代で関心をもつのは富永さんくらいだった。

というわけで、バツテンの由来予想はハズレ。ハズれたが、富永設計のバツ

ン住宅が川崎市の千年新町のただ中にあることは図像的にはおもしろく思った。戦後の住宅不足解消のため川崎市が田んぼを埋め立てて生まれた典型的な戦後すぐの郊外住宅にほかならず、戦前の田園都市系郊外住宅と違い、緑地や公園などの都市的ゆとりをいっ

3階和室

3/バツテンが空間をひとつとしている。

3



1階居間・食堂

4/1階居間・食堂は、父の建てた和風住宅へと連続する。

4



さい欠き、ひたすらのグリッド状住宅地。コルのバリ改造計画も、ひたすらのグリッドとバツテン計画で、その名は輝く都市。川崎は千年新町、なんか似ている。千年新町のひたすらグリッドに富永さんのバツテン住宅が投入され、極小・輝く都市が発生した、といえなくもない。

などと考えながら富永さんと一緒にまず外を眺め、次に中に入り、問題のバツテンだらけの2階に上がった。2階を一巡し、3階にも上がり、ひと安心。

バ

ツテンが写真で見えたようには目障りではないばかりか、斜めに走る木材が、平坦で動きのない壁面に活気と締めまりを与え、空間の質を高めている。バツテンの投入が、危惧したように空間を内側からバラけさせる働きはしていない。

バツテンの働きについて富永さんは、



Tominaga Yuzuru × Fujimori Terunobu

現代
住宅
併走

2階書斎

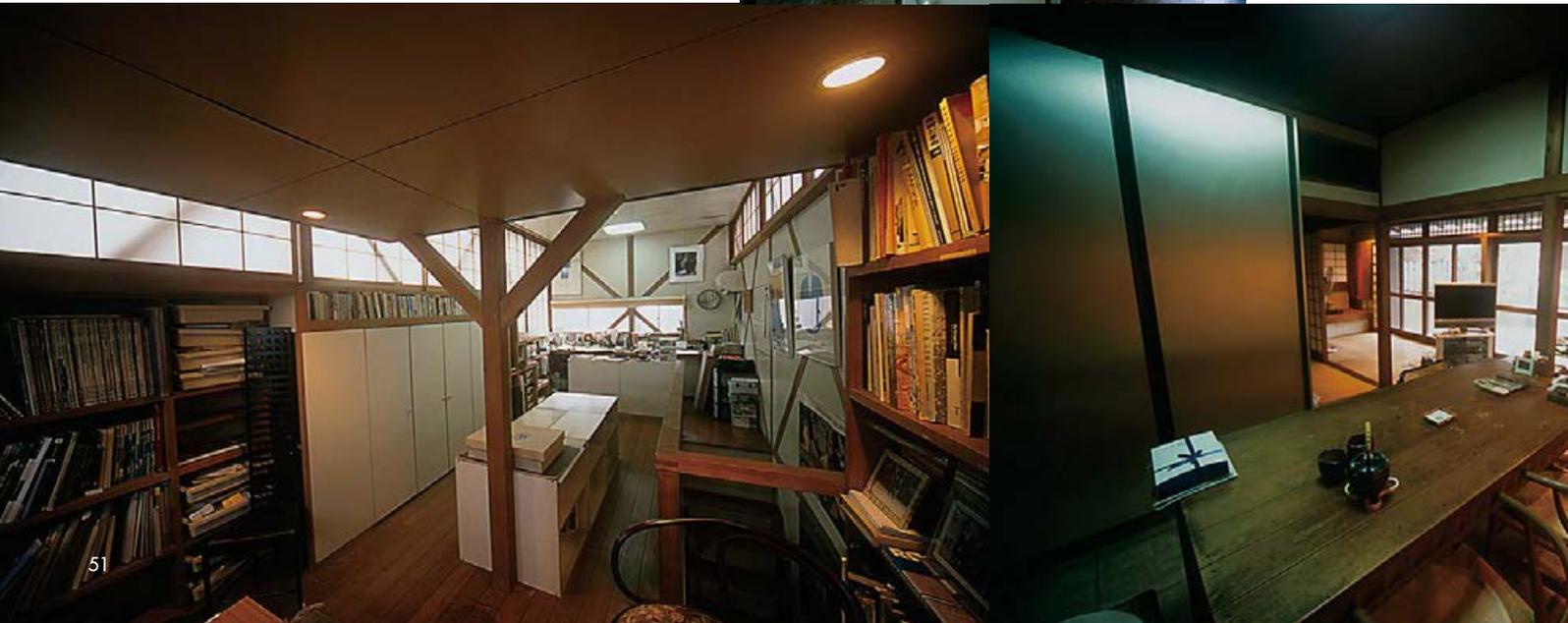
6 / 3階和室の下から
見る2階の全景。

6

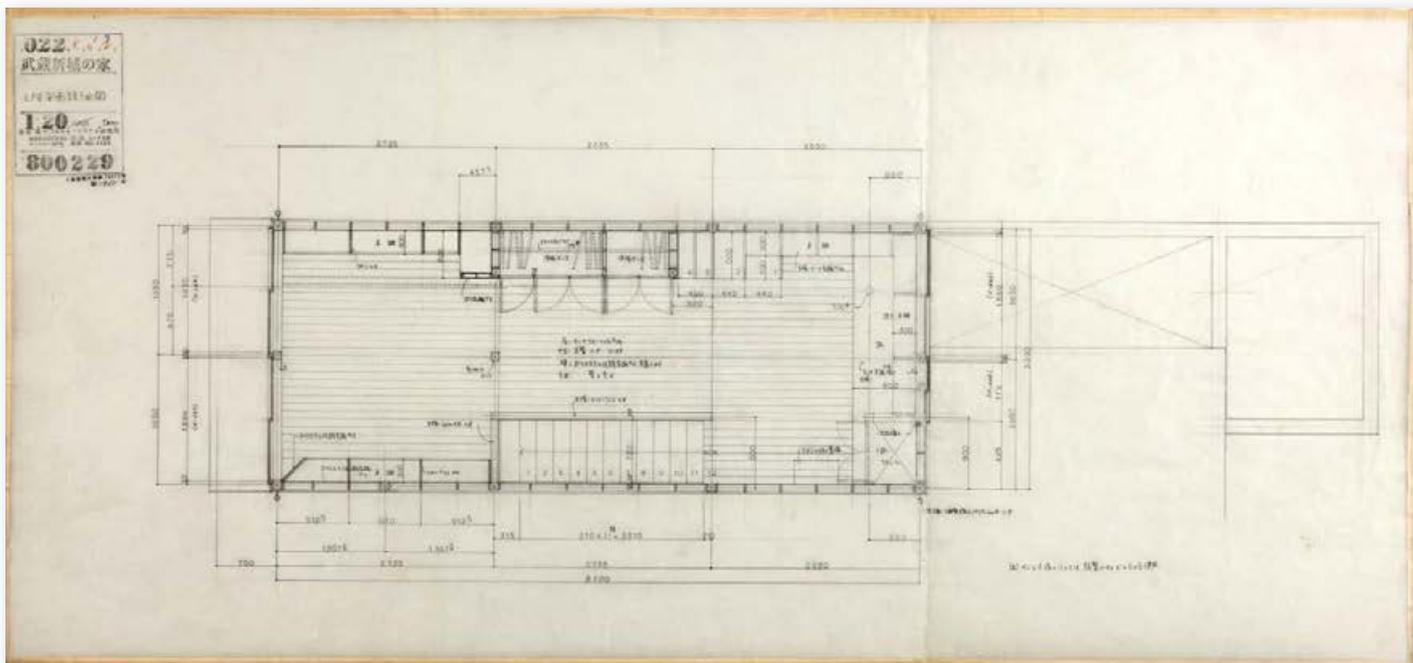


5

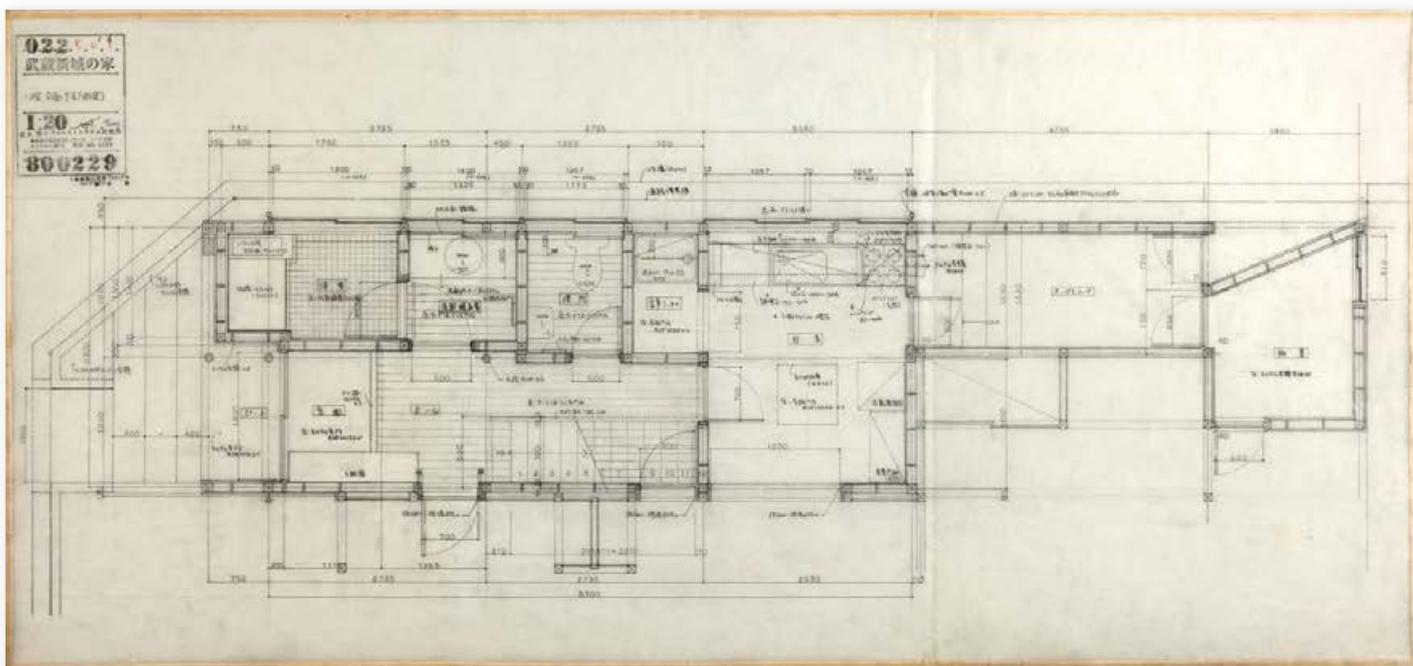
1階玄関・
居間・食堂
5 / 右手に玄関、左手
に食堂・居間、そして
和風住宅。



「武蔵新城の住宅」平面図



2F



1F 

Tominaga Yuzuru × Fujimori Terunobu

現代
住宅
併走

「斜材の交差は面内の位置を決定づけるから、垂直と水平のみの単純な柱梁構造の場合よりその要素の統合力は著しく強められているように思う。家具が入り、雑多な日用品が入り、本や用具が散乱するときも、それらを位置づけ、全体へと結びつける変わらぬ強い統合要素である」

空間を統合するバツテン。バツテンがおもに外壁に入っていることを考えると、ちょうど荷物を紙で包んで紐でグルグル縛るように、雑多な物を納めた狭い家という梱包がバツテンのおかげでまとまりを保っている。

梱包のたとえはけっこう正確で、この空間のポイントは、富永さんが言うように、バツテン状構造体の内側と外側に2枚の表皮、具体的にいうと内側は障子という内皮、外側はサッシ窓という外皮があり、バツテンという紐と内外2枚の皮で、この、平面は細長くて立面は縦長という不安定きわまりない空間は包まれ、辛うじて形を保っている。

室

内の仕上げの決定にあたり、富永さんは「ポリエスチル化粧板」を使った。

当時、家具の表面にのみ張られていた仕上げ材だ。普通ならシナベニヤかクロス張りにするところをそれよりずっと硬質な材を持ち込んだのもいい効果を生んでいる。バツテン木材は目に強いから、普通の仕上げでは木材が勝ちすぎて

武蔵新城の住宅

The House of Musashishinjo



7/北側外観。

建築概要 (増改築)

所在地	神奈川県川崎市
主要用途	専用住宅
設計	富永譲+
	フォルムシステム設計研究所
施工	山洋木材
敷地面積	224.40㎡
建築面積	111.08㎡(既存部分を含む)
延床面積	65.03㎡(増築部分)
階数	地上3階
構造	木造
竣工	1980年
図面提供	富永譲+
	フォルムシステム設計研究所

富永 譲

Tominaga Yuzuru

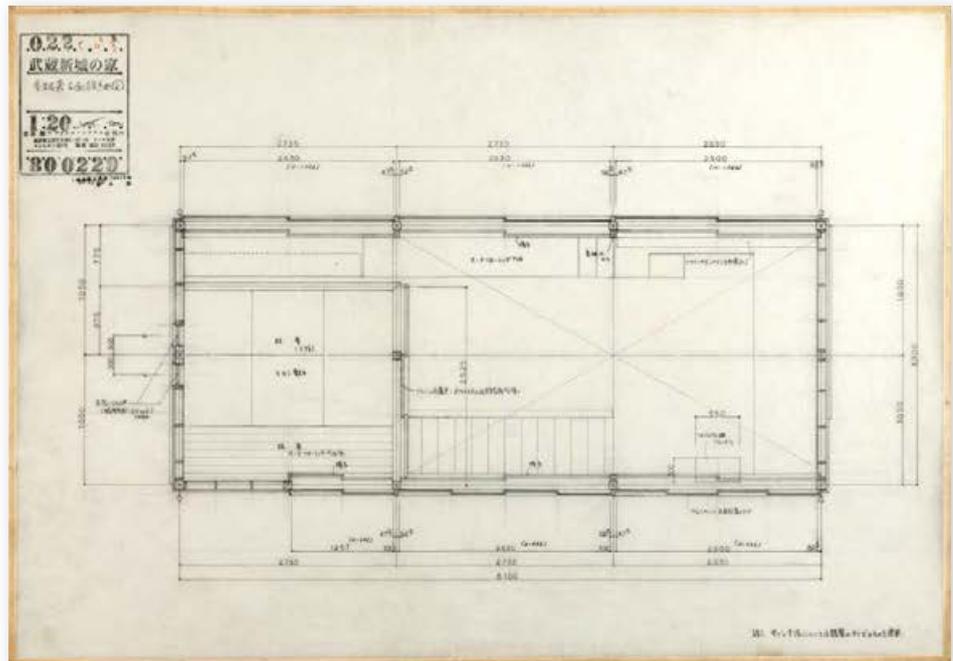
1943年台湾の台北市に生まれ、日本に引き揚げてからは松本と川崎で育つ。67年東京大学を卒業し、菊竹清訓建築設計事務所を経て、72年独立。デビュー作は「青山南町の住宅」(73)。プレースを全面的に出した木造住宅で高く評価され、野武士世代の建築家としてデビューする。仕事がない時期、コルビュジェの住宅模型をつくっては研究を重ね、思いもよらず70年以後のル・コルビュジェ研究の先駆者となり、やがてライフワークとなって今日に至る。



藤森照信

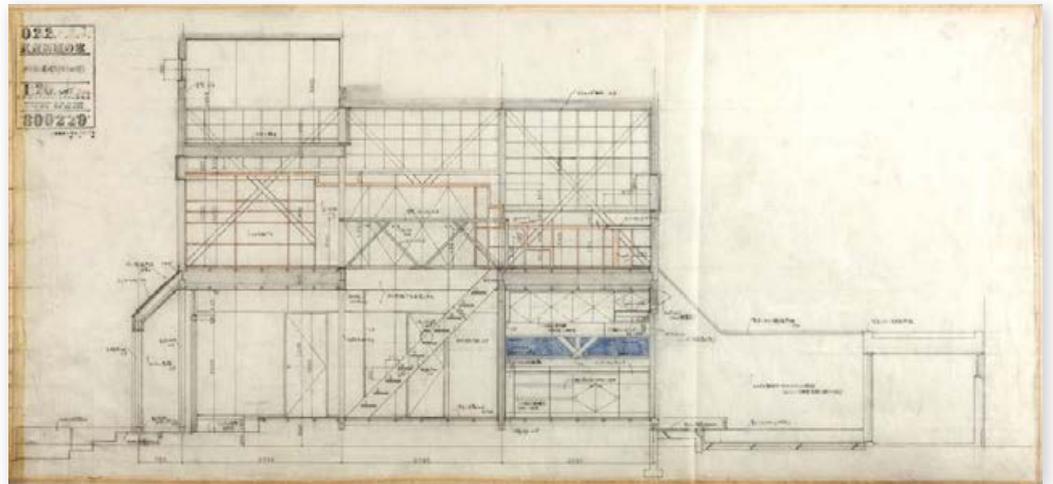
Fujimori Terunobu

建築史家。建築家。東京大学名誉教授。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞＝『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞など。



3F

「武蔵新城の住宅」断面図



パツテンが浮き出て見えるが、ポリエステル化粧板の硬質さがパツテンの浮上を抑え込み、壁面の素材感バランスを保つことに成功している。

一巡し、小夜子夫人からバスタをご馳走になり、ふと思いついてもうひとまわりした。ヤハリそうだった。外を見やすい高さに窓が開いていない。この空間は外に向かって閉じている。

すでに、「住吉の長屋」(76) / 『OTTO通信』97年VOL6・原・現代住宅再見5) や「中野本町の家」(76) / 『OTTO通信』98年VOL3・原・現代住宅再見8「黒の回帰」文中) などで述べたように、1970年代、私たち野武士世代は、精神的にもつくる住宅も自閉していた。野武士は城に依らず野山に伏し隠れていたことから、野伏しとも書くが、富永譲も、安藤や伊東に負けず劣らず川崎の藪のなかに伏せていたことを知り、うれしかった。

自分の家のように取り組む

「本気の家づくり」

平均年齢は約36歳。今年で創業55年を迎える「あいホーム」だが、社員は総じて若い。そして元気がいい。

「うちは体育会系なんです」と笑う伊藤耕社長自身も、去年は6度、マラソンの大会に出場したというスポーツマンだ。そんな社長を先頭に、今年の仙台国際ハーフマラソンには、「8割は出場するんじゃないかな」というエネルギーシユな社員たちが、急成長を続けるあいホームを支えている。

経営を学んでから家業を継ぐ

あいホームは、もともと建築資材を扱う「伊藤商会」としてスタートした。その後、一般建築業、建築士事務所、宅地建物取引業と登録を重ね、2000年に本格的に住宅事業に参入。大手のフランチャイズに加盟して家づくりのノウハウを蓄積し、08年に独自ブランドとしての「あいホーム」をスタートさせてい



Ito Ko

伊藤耕（いとう・こう）／1955年宮城県生まれ。立教大学経済学部卒業。松下電工を経て、83年伊藤ベニヤ商会（現・あいホーム）入社。92年より代表取締役。時代の変化、環境の変化への対応を重視しながら、建築資材の販売、建築業、不動産業と多角的に展開。2008年に社名を「あいホーム」に変更し、以降、住宅事業に注力する。経営理念は「お客様第一主義」「企業は人なり」。

代表取締役

伊藤 耕 さん

る。現在の社員の多くは、住宅事業参入後に入社しているため、平均年齢も若いということだ。

伊藤さん自身は、大学で経営を学んだ後、松下電工（現パナソニック）で3年間修業。月次決算の習得など、経営学に磨きをかけて地元に戻る。それが、ちょうど会社が宅地建物取引業登録をした年。つまり地元に戻って家業を継いだとはいえ、ハウスビルダーとして会社が成長する過程は、伊藤さんが家業を継いでからの歩みとほぼ一致する。伊藤さんの馬力と人柄と家づくりへの思い、それに独自の経営哲学が加わって、あいホームが生まれ、成長を続けているといえるだろう。

徹底したCSと社員のモチベーションを保つ手綱さばき

あいホームで伊藤さんが主唱するのが「本気の家づくり」。「本気」で家を建てようとする人たちに、自分たちも「本気」になって、誠心誠意対応する。その心意気をまとめたものが「お客さまへの誓い」と題する10カ条。「有利な情報だけでなく、不利に

写真上／1階和室にて。写真はすべて「あいホーム仙台南店」モデルハウス。子どもふたりの4人家族を想定したモデルハウスは、住宅展示場にありがちなオーバースペックを排し、建てる家そのものを見せよう。右／リビングダイニング。ここは1階にLDKを置くタイプ。「高品位の家」「コンパクトな家」などのカテゴリーごとに豊富な間取りが用意されている。



今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

Data



AI HOME Co., Ltd.

(株)あいホーム

●本社所在地(仙台北店)

宮城県黒川郡富谷町
ひより台1-43-21

●電話

022-348-8151

●代表取締役

伊藤 耕

●会社創業

1959年

●従業員数

38人

●事業内容

注文住宅・分譲住宅・
土地活用

●売上高

34億5,000万円
(2013年3月期)

●URL

www.aihome.biz/

●TOTO使用機器

バスルーム/サザナ

トイレ/ZJ(1F)、

CS340シリーズ(2F)

洗面所/ラバトリードレッサー
STシリーズ



なることもすべてお客さまにお
伝える」の第1条から始まっ
て、仕事に対する姿勢、訪れる
人に対する心配りを列挙する。
さらに、現場で作業する協力会
社の職人たちには「現場CSル
ール」があつて、1日5回の清
掃をはじめ、あいさつのしかた
から靴の脱ぎ方、履き方まで細
かく決められている。ほかのビ
ルダーとの違いについて、「建築
中の現場を見て、私たちの本気
度を知ってもらうこと」と伊藤
さんが胸を張り、お客さんのほ
とんどが担当者で現場の雰囲気
が気に入って依頼を決意する
というもうなずける。

進める。数年前に新設された「購
買課」は、あいホームの家に使
われる建材や機器など、あらゆる
ものを検討、購入する専門部
署だ。「1次取得者がターゲット
ですから、それまでお住まいの
家賃と同額で買えることが前
提。そこから商品も考える」あ
いホームにとって、仕入れ品の
性能と価格はとても重要。新し
い製品、商品につねに目を光ら
せ、性能を比較検討し、価格の
交渉を行うことで、あいホーム
の家は安定した性能と価格を保
つことができる。

自負があり、その自信を支える
のが、多方面にわたる情報収集
と繰り返しされる検討と研究なの
である。

今年、社内キャンペーンの
目標を達成したら「社員全員で
ドイツ・カールトンに行つて、リ
ッツ・カールトンに泊まる」と
いうごほうびが用意されている。
むろん、ただ遊びに行くのでは
なく、「ホスピタリティを学ぶ」
ことも大切な目的だが、社員の
士気は当然上がる。購買層の要
求をすばやく取り取って反映
させながら、かつ社員のモチベ
ーションを高く保ちつづけるこ
と。伊藤さんの巧みな手綱さば
きが、あいホームの成長を加速
させている。

取材・文：市川幹朗 写真：山下恒徳

写真左上/建物外観。右/上
から、1階のトイレ、浴室、
洗面所。耐震性、断熱性など
基本的な家の性能を確保する
ことはもちろん、設備機器も
高性能品を標準装備。購買部
のきびしいチェックを通過し
た、性能、価格、デザイン性
を兼ね備えた機器が厳選され
ている。

乾久美子+東京藝術大学 乾久美子研究室 展

「小さな風景からの学び」

4/18~6/21 2014

気になる風景には、
学ぶべき「サービス」が
あふれている——
建築家、乾久美子氏が、
学生らとともにひたすら採取しつづけた
日本全国の膨大な「小さな風景」。
それらがかもし出すさまざまな質を
「サービス」という切り口から分類し、
絞り込んだ2,000点あまりを展示します。
身近な風景に新たな視点と
価値を与えることで、
これからの空間や建築のありようを
考えるためのヒントを探ります。



京都府与謝郡伊根町



愛媛県今治市「大三島ふるさと憩いの家」



熊本県阿蘇郡蘇陽町



石川県輪島市

不思議なことに、そんなバラバラな対象であるにもかかわらず、なぜか「これはいいね」という感覚だけは一致しました。その感覚とはなんなのかを、最後の最後まで言語

最終的に、大量の写真が集まりました。「気になる」という撮影者の気持ちがよくわかる風景ばかりです。見る者を誘い込むような魅力にあふれ、あたかも擬人化したくなるような表情の豊かさがあります。しかし、内容に相当なバラツキがありました。いかにも居心地のよさそうな木漏れ日が満ちる木陰の風景にひかれて撮影されたような写真群がある一方で、たとえば、プラスチックの食品トレーでできた神輿といった不自然きわまりないものの写真もたくさんありました。また、商業的な行為から生まれているものもあれば、自治会のものや市民の個人的な活動もあるというように、その風景を生み出す主体もさまざまです。さらに、用水路や水路に架かる橋などのインフラ的要素の場合もあれば、単なる植物でしかない場合もありました。人の関与も強かったり、弱かったり……。

さまざまなサービスの表情

文／乾久美子

小さな風景からの学び



写真の分類作業風景

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY・MA

次回
予告

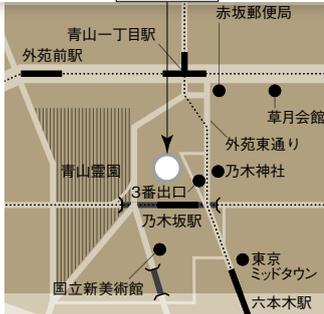
TYIN
テーネステュエ・
アーキテクツ展

ノルウェーの若手建築家ユニット、TYINテーネステュエ・アーキテクツ。廃材を再利用したポートハウスの建て替えや、ノルウェーの建築学生たちとワークショップを行いながら、地元の素材や労働力を使って建設した、タイの避難所の子どものための図書館と浴場施設など、彼ら独自の実践的な設計活動を紹介します。

会期	2014年7月10日(木)～ 9月20日(土)
講演会	7月10日(木) 津田ホール ※事前申し込み制 詳細は5月中旬、 TOTOギャラリー・間 ウェブサイトにアップします。

TOTO
ギャラリー・間

所在地	東京都港区 南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル3F
電話	03(3402)1010
ファクス	03(3423)4085
開館時間	11:00～18:00
休館日	日曜日・月曜日・祝日、 および、展示替え期間、 夏期休暇、年末年始
入場料	無料
アクセス	●東京メトロ千代田線 「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線 「六本木」駅下車 7番出口徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線 「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・ 半蔵門線、都営地下鉄 大江戸線「青山一丁目」駅 下車4番出口徒歩7分



www.toto.co.jp/gallerma/

会期／2014年4月18日(金)～6月21日(土)

Inui Kumiko



撮影／加藤孝司

いぬい・くみこ／1969年大阪府生まれ。
92年東京藝術大学美術学部建築科卒業。
96年イエール大学大学院建築学部修了。
96～2000年青木淳建築計画事務所勤務を経て、
00年乾久美子建築設計事務所を設立。
11年東京藝術大学美術学部建築科准教授就任。
おもな建築作品に、「Dior Ginza」(04)、「アパートメントI」(07)、
「フラワーショップH」(09)、「KYOAI COMMONS」(11) など。
現在は東北で小・中学校の計画や、宮崎県延岡市におけるまちづくりが進行中。



東京都目黒区「目黒川」



栃木県宇都宮市「豊郷北小学校」



東京都中央区



長野県長野市「権堂駅」

乾久美子講演会
「小さな風景からの学び」

日時	2014年4月24日(木)17:30開場、18:30開演、20:30終演(予定)
会場	建築会館ホール(東京都港区芝5-26-20)
定員	350人／参加無料
参加方法	ウェブサイトより事前にお申し込みください。
申し込み期間	4月6日(日)まで 抽選のうえ、4月16日(水)までに結果をご連絡いたします。

化することはできませんでしたが、最終的に見つかったのは「サービス」という言葉でした。デザイン的な洗練からほど遠いような類いのものや場所について会話をするときや、人のかかりによって生まれる「生活景」などについて議論する際に、なにげなく「サービス精神があるかないかがポイントだね」と指摘しあっていたのですが、そうした感覚は、人の関与の仕方だけにとどまらせる必要がないことに気づいたので。生態学で使われるこの言葉を写真のなかの風景の評価に適用すれば、そこから何かを学べるのではないかと考えました。

展覧会では、大量の風景写真の展示を通して、風景が最も出さずさまざまなサービスの表情を楽しむような視点と、そこからの考察を提示します。自然からのサービス、人為的なサービス、偶然のサービス、ユーモアのあるサービスなど、私たちは空間のなかでさまざまな次元でサービスを享受しつつ、その質を表情として読み取っているのではないかとこの仮説を通じて、「生きた／計画された」といった区別を超えた空間や建築の価値のありようを考えていきます。

私たちがシャッターボタンを押した理由は、風景が投げかけるほほえみに無意識のうちにほれ込んでしまったからだと思えます。そうした意味で、これらの写真群はある種のポートレイトのようなものともいえるかもしれません。にこりと笑いかけたいたり、とほけていたりするように感じられる風景の表情を、会場で感じ取っていただけたらと思います。



TOTO News

News File

TOTO tsushin 2014 Spring

TOTO

TOTO news 1

TOTO滋賀新工場 平成25年度省エネ大賞 「経済産業大臣賞」を受賞



TOTOの最新情報

TOTOが自社の省エネモデル工場として建設した滋賀工場新西棟の取り組みが、「最先端の省エネ技術を導入したモデル工場プロジェクト」として、平成25年度省エネ大賞(*) (省エネ事例部門)において最高賞である「経済産業大臣賞」を受賞しました。本賞は、すぐれた省エネ活動事例や技術開発による先進型省エネ製品などを表彰し、省エネ意

識の浸透、省エネ製品の普及促進などに寄与することを目的としており、省エネ事例部門は企業、工場・事業場などの省エネ推進活動を対象としています。ネオレストなどのトイレの腰掛便器主力製品を生産する新西棟は、23年ぶりの国内新工場として2012年2月に稼働を開始。排熱回収自己再生型のファイバー式高効率焼成窯や、1,200℃まで

対応可能なバーコードを用いた世界初の衛生陶器個体識別管理システムのほか、成形室の省エネ型新空調設備やエネルギー管理システムなど、さまざまな省エネ技術を導入し、大幅な省エネとCO₂排出量削減(旧工場と比較して43%削減)を実現。自社内だけでなく、窯業分野の製造工場のモデルとなる事例であることを高く評価されました。

*主催：一般財団法人省エネルギーセンター



滋賀工場新西棟



高効率焼成窯

TOTO news 2

第9回TOTO水環境基金 国内22団体・海外3団体への助成を決定

TOTOグループでは、社会貢献活動の一環として2005年に設立した「TOTO水環境基金」を通じて市民団体の環境プロジェクトを支援しています。昨年8～9月に第9回の募集を行い、選考委員会による選考の結果、国内22団体、および海外で活動す

る3団体へ総額1,300万円の助成を行うことを決定しました。今回から助成金算出の考え方を一新し、ステークホルダー(お客さま、社員、お取引先、株主、社会)のみなさまによる環境貢献へのかかわりが増すほど助成金が増えていく仕組みに

しました。お客さまのかかわり方は、節水商品のご購入に応じて基金へ拠出するようになっています。また、これまでは助成団体の活動に社員がボランティアとして参加してきましたが、現在は、TOTO水環境基金のウェブサイトで一般のお客さまの

参加も募集しています。さまざまな環境活動をご紹介することで、多くの方々に環境問題・地域課題を知っていただき、地域のみなさまとともに、身近な環境問題・地域課題の解決に取り組んでいきたいと考えています。

→ www.toto.co.jp

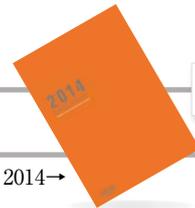


Cera trading news

セラのお知らせ

「CERA 総合カタログ 2014」を発行しました

CERA 総合カタログ 2014→



CERA TRADING



↑「セラオリジナルコレクション」CEY21717 296,000円(税抜き) 1,700×750×540mm

セラトレーディングでは、2014年の新商品を掲載したカタログ「CERA総合カタログ 2014」を発行しました。全6タイプから設計する空間にぴったりの洗面器をお選びいただける「アーキテクチュラ」シリーズや、ふっくらとした曲面がリラックスタイムを生み出すバスタブ「セラオリジナルコレクション」など、デザインにこだわりつつお求めやすい価格の商品を多数ご用意

しております。カタログのご請求は、セラトレーディングホームページ、またはファクスにてお申し込みください。

↓「アーキテクチュラ」
ピレロイ&ポッホ社 VB417660
52,000円(税抜き) 615×415mm



→ www.cera.co.jp

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など
知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

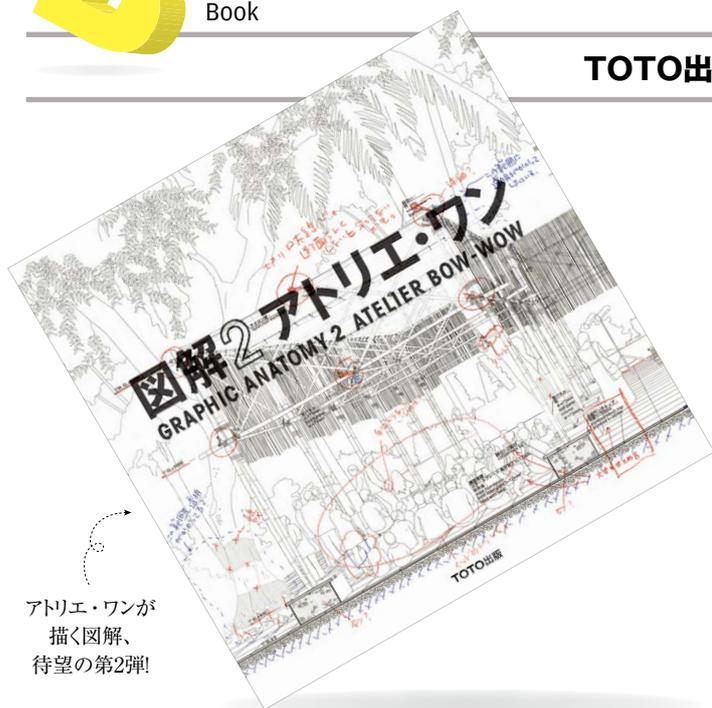


Book

TOTO出版

TOTO出版のお知らせ

Book 1



アトリエ・ワンが
描く図解、
待望の第2弾!

『図解2 アトリエ・ワン』

独自の方法で空間や状況を表現した『図解 アトリエ・ワン』に続く第2弾。1巻目と同様の住宅作品だけでなく、公共施設やマイクロ・パブリックスペースといった大小さまざまなバリエーションの作品が表現された本書からは、アトリエ・ワンの建築に対する視点や、時代とともに変化してきた活動の広がりを感じることができます。書き下

ろしの論文「図解解題」では、「図解すること」の価値について、空間表現の歴史とともに解き明かしています。

- 著者:アトリエ・ワン
(塚本由晴+貝島桃代)
- 定価:3,000円+税
- 体裁:260×260mm、ソフトカバー、174ページ、和英併記

→ www.toto.co.jp/publishing

Book 2



乾久美子が
追いかけた、
ささやかな
公共空間の記録。

『小さな風景からの学び——さまざまなサービスの表情』

震災復興の現場で見たある光景をきっかけに、建築家によって「つくり込まれた空間」とは異なる、自然発生的に生まれた場所の魅力に圧倒された乾久美子氏。現代におけるそのような場所の価値をとらえ直し、設計活動に生かせる何かをつかみたいとの想いをもったという。本書は、その想いを発端として行われた乾氏と東京藝術大学乾研究室の

学生による全国の公共空間の調査をもとに、彼らが思い思いに見出した魅力的な場所たちを約2,000枚の写真で伝える貴重な記録集です。

- 著者:乾久美子+東京藝術大学 乾久美子研究室
- 定価:2,500円+税
- 体裁:B5判変型(175×252mm)、ソフトカバー、240ページ

→ www.toto.co.jp/publishing



プレゼント

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方の中から、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介ください。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで

電話/093(513)6234

e-mail/toto_tsushin@jlink-net.com

*法人あての送付となります。

セラトレーディング	Bookshop TOTO	TOTO出版	
cera trading	Bookshop TOTO	TOTO publishing	
<ul style="list-style-type: none"> ●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1F・地下1F ●電話/03(3402)7134 ●営業時間/10:00~17:00(日曜日は予約制) ●定休日/月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始 	<ul style="list-style-type: none"> ●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2F ●電話/03(3402)1525 ●定休日/日曜日・月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・夏期休暇・年末年始 	<ul style="list-style-type: none"> ●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 ●電話/03(3402)7138 ●ファクス/03(3402)7187 ●全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。 	

次号『TOTO通信』は2014年7月上旬発行の予定です。

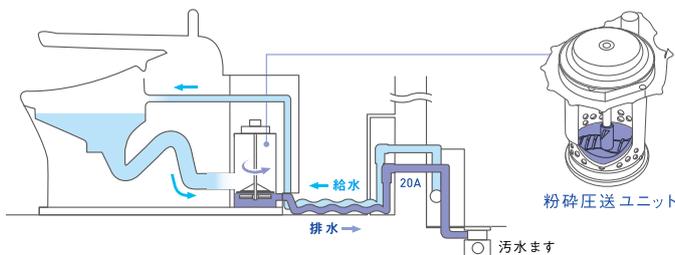
アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

トイレに一人で行けた日、
母は、いつもよりよくしゃべった。



ベッドの隣に水洗トイレがあれば、介護は変わる。

たとえ介護が必要になっても、トイレには自分で行きたい。
その思いに、TOTOはベッドサイド水洗トイレで応えます。
その名のおりベッドの隣、つまり寝室に置ける水洗トイレ。
新技術「粉碎圧送ユニット」が排泄物を細かく砕き、TOTOならではの排出技術で流します。
それにより、壁に通す配管が細くなるので、最小限の工事で設置可能です。
水洗だから、臭いの心配と後始末の手間がいりません。
もちろんウォシュレットです。いつもの快適さを寝室でも。
これからは、すぐそこに水洗トイレ。移動にともなう転倒や失禁などの不安を減らします。
なによりも、自分でトイレに行きたいという介護される方々の気持ちをたいせつにできます。
支える人を、支えられる人を、支えたい。
これは100年近くトイレに関わってきた企業として、介護のためにできることはなにかを
考え続けたTOTOが、ようやくたどり着いたトイレです。



※写真と図はイメージです。
※「ウォシュレット」はTOTO株式会社の登録商標です。



ベッドサイド水洗トイレ

ウォシュレット付
希望小売価格 ¥528,000(税込 ¥570,240)

商品についての技術的なお問い合わせ、TOTO技術相談室

0570-01-1010

受付時間：平日9:00～18:00 / 土曜日9:00
～17:00(日・祝日、夏期休暇、年末年始を除く)

www.com-et.com

あしたを、ちがう「まいにち」に。

TOTO

○商品についての詳細は弊社カタログ・商品サイトをご覧ください。○現場の条件によっては、取り付けできない場合もございます。○戸建・高齢者施設向け商品です。○実際の商品については、以下のショールームにてご覧いただけます。(東京センター・横浜ランドマーク・千葉・つくば・新潟・金沢・名古屋・四日市・大阪・広島・岡山・鳥取・福岡・北九州)

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(513)6234 FAX.093(571)0999

*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。